



このマーク(複十字)は、
世界共通の結核予防運動の
旗印です。

No.
407

2022.11

結核・肺疾患予防のための 複十字



公益財団法人結核予防会

本誌は複十字シール募金の
収益により作られています
<https://www.jatahq.org>

結核予防週間

スカイタワー西東京ライトアップ

結核予防週間である9月24日から30日の間、スカイタワー西東京が赤くライトアップされました。赤は結核予防のシンボルカラーです。

今年も赤くライトアップされたスカイタワー西東京の写真を応募し、お寄せいただいた写真を表紙と裏表紙でご紹介しております。(右写真：本部職員Tさん撮影)



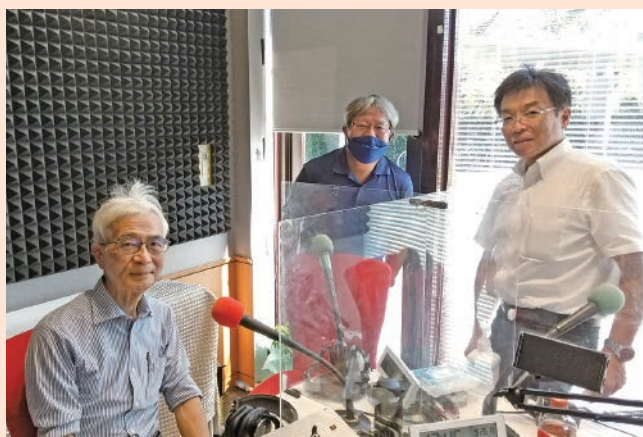
ラジオ出演

番組名：ゆったり清瀬

放送局：TOKYO854 くるめら

日時：2022年9月26日(月)12時～

TOKYO854 くるめら「ゆったり清瀬」にパーソナリティの柳瀬さん・清瀬市役所の植田部長・石川顧問の3人が出演しました。結核とはどのような病気であるかに始まり、日本が低蔓延国入りしたこと、結核予防週間の西東京スカイタワーライトアップの写真募集、標語募集の結果など様々なトピックをお話しいただきました。



左から石川顧問、パーソナリティの柳瀬さん、清瀬市役所の植田部長
(スタジオの放送室にて)

< Gelatle TOKYO > プレミアムジェラートが 三越伊勢丹オンラインストアで購入できます

2022年10月から12月までの期間限定販売で、6個入りと12個入りの商品があります。売上げの一部が「複十字シール募金」に寄附されます。



ご購入はこちら！



結核予防会

理事 中島 正治



今年6月に、ご縁があって全国訪問看護事業協会の会長に就任しました。

訪問看護ステーションは、今では医療・介護における普通で不可欠な光景になっていますが、1992年に制度化されて以降、後期高齢者の増加や療養の選択肢としての在宅医療・介護の見直しなどによるニーズの拡大もあり、現在約14,000箇所を超えるなど拡充しつつあります。

一方、結核は2類感染症で、療養の基本は入院となり公費負担のため、在宅医療や訪問看護とは無縁と思われるかもしれません。

しかし、近年の我が国の新規結核登録は年間約12,000人ですが、70歳以上の高齢者が6割超を占めます。その原因は、若い時に結核に感染したものの治まっていたものが、他の病気や体力、免疫力の低下などで再活性化したものが多くを占めると言われています。

在宅医療をしている高齢の患者さんでは、発生しやすい状況が考えられます。

幸い、これまで在宅医療における結核発症に伴う大きな事故の発生は知られていませんが、残念ながら実態は、十分明らかになっているとは言えません。

若い世代が在宅医療や訪問看護、介護を担当するようになり、結核に対する認識は必ずしも高いとは言えず、知識と経験や研修が今後一層求められます。

我が国の結核は、昨年ようやく低蔓延国に仲間入りしましたが、高齢者の結核再活性化の他にも感染外国人の増加、多剤耐性結核の増加など、新たな課題も出てきています。

我が国だけでなく途上国などを含めて、こうした分野に対する積極的な対応と行動が結核予防会には期待されています。

低蔓延国化に安心することなく、関係の皆様の一層のご理解とご尽力、ご協力をお願い致します。



Contents

■メッセージ

訪問看護と結核 中島正治…… 1

■結核予防週間

2022 結核予防週間レポート …… 2

結核予防週間支部・本部活動報告 …… 5

■令和4年度都道府県知事表敬訪問報告(続報) …… 9

■結核対策活動紹介

コロナ禍での当院における結核診療の現状と

奈良県結核対策医師相談事業について 玉置伸二……12

■教育の頁

精神科領域に関連する結核症の問題と

保健福祉分野との連携 阪下健太郎……14

■世界の結核研究の動向(31)

抗酸菌感染症におけるIL-17の関与と

治療標的となる可能性について 多田納豊、富岡治明……16

■世界の結核事情(34)

フィリピンでの結核対策—結核検診の強化と

統計データの活用推進 濱田洋平……18

■TBアーカイブだより(2022年11月)

昭和20年代の療養生活—中村勝治氏のアルバム

工藤翔二……20

■ずいひつ

日本の結核対策の歴史から
新型コロナウイルス感染症を考える(後編) 藤田明……24

■コロナ禍における防災対策ワンポイント・アドバイス

第4回命を守り、暮らしを支える「災害情報」
宮崎賢哉……25

■支部長だより

支部長就任のご挨拶 富松栄三……26

理事長就任に当たって 平尾正人……26

▽予防会だより・シールだより

○令和4年度第1回複十字シール運動担当者オンライン会議
佐藤奈津江……27

○スカイタワー西東京ライトアップ

○ラジオ出演

○<GelatlleTOKYO>プレミアムジェラートが

三越伊勢丹オンラインストアで購入できます

○結核予防週間スカイタワー西東京ライトアップ写真

[表紙]

撮影者：笹川功さん／撮影地：西東京市新青梅街道の歩道橋

2022 結核予防週間レポート

結核予防週間にあたり、全国各支部で工夫を凝らした活動が行われました。その活動を紹介いたします。

北海道



婦人会の皆さまの協力を得て、札幌市の地下鉄北 24 条駅周辺において、街頭募金を行いました。

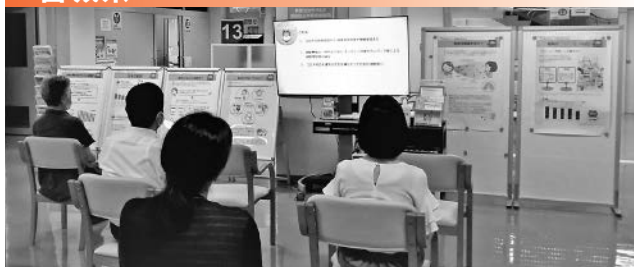
コロナ禍でも複十字シール運動リーフレットやマスクなどを受け取って頂くことができ、結核予防の大切さを広める活動ができました。

青森県



盛運輸アリーナで行われた RAB まつり（青森市）にて、2 日間で概ね 930 セットの広報資材を配布した。来場者へ結核予防や複十字シール募金への御協力を呼びかけ、10,330 円のあたたかい募金を皆様からいただいた。

宮城県



結核予防週間の期間中、外来及び健診受診者に受付窓口で「結核の常識」を配布した。また、今年度初めて仙台市内の地下道をお借りしパネルの展示を行った。

山形県



県主催のやまがた健康フェア 2022 に出展。結核の常識、複十字シール運動リーフレットを配布し、結核予防の普及啓発を行った。併せて無料の骨密度測定やプレスト・アウェアネスをテーマとしたシンポジウムを開催し、多くの方に会場いただいた。

群馬県



群馬県ぐんま男女共同参画センターにて、来場者に結核の現状や予防法について説明し、リーフレット・小型シール・ハガキ・ボールペンなどを配布して、普及啓発活動を行った。多くの方に受け取っていただいた。

秋田県



秋田駅東西連絡通路「ぼぼろ〜ど」から秋田駅前仲小路にかけて活動を実施。コロナ禍の中、手指消毒を徹底し、大きな声での呼びかけを抑えるため、協力依頼のボードを掲げ、目でわかるように募金協力を訴えた。

栃木県



3 年ぶりに婦人会と協力して街頭キャンペーンを実施した。天気にも恵まれ、幅広い年代へ結核に関する普及啓発活動を実施できた。また、街頭募金にも積極的に協力していただけた。足を止めてパネルを見たり通行している人たちに向けても啓発を行った。

埼玉県



当支部施設（健診センター）へ、結核予防週間メッセージの横断幕を掲出しました

千葉県



イオンモール幕張新都心ホビーコートにて、複十字シール運動の展示ブースを設置し、結核についてのパネル展示と併せて広報資材を配布しました。ブースには、当財団のマスコットキャラクター等が登場し、啓発の呼びかけをしました。

神奈川県



複十字シール運動ポスター、結核予防週間ポスターを絵画用イーゼル台に乗せて、のぼりとともに海老名駅周辺4箇所に設置。これに合わせて、スタッフも4班に分けて募金活動をおこなった。晴天の土曜日であることや中央公園のイベントなどにより人通りは多く感じられ、用意した1000セットも6割強は配布することができた。

富山県



富山市総曲輪通り商店街にて、富山県結核予防婦人会の方々とともに、結核の常識2022、複十字シール、ボールペン、メモ帳等を配布し、普及啓発を行った。

岐阜県



新型コロナウイルス感染症対策を行いながらの啓発活動の難しさを感じた。「まだ結核ってあるの?」「まだそんなに罹る人がいるの?」といった声があがり、丁寧に説明することで、結核のことを立ち止まって考えていただくことができた。

東京都



秋葉原UDX サボニウス広場にて、広報資材の配布とともに東京都と共催し、健康診断を受ける機会の少ない若者を対象に、無料結核検診の受診勧奨を行った。

新潟県



複十字シール募金のほか、結核クイズを行いました。新型コロナウイルス感染症の影響で街頭等での募金活動は3年振りの実施となり不安もありましたが、職員の予想を上回り、約100組を超える方からクイズに参加をしていた。老若男女問わず多くの方に向けて複十字シール募金、結核について発信をすることができました。

石川県



金沢健康プラザ大手町で開催された「第43回健康づくりフェア」にて、複十字シール運動リーフレット、結核の常識2022、ポケットティッシュを配布し、複十字シール運動への協力を呼びかけた。

静岡県



静岡市ふれあい健康増進館ゆららで開催した健康まつりに参加して、結核の常識・ポケットティッシュ等の広報資材を配布し結核予防の啓発活動を行いました。また、静岡市住民を対象として実施している胸部レントゲン検診も実施しました。

三重県



三重県立図書館において、結核予防週間ポスター及び複十字シール運動ポスターを掲示するとともに、結核の常識 2022、複十字シール運動リーフレット、バンドエイド、クリアファイル、マスクを配布した。

大阪府



「結核予防週間啓発用 CM 大型ビジョン放映」
大阪のど真ん中。待ち合わせ場所として有名な大阪梅田駅の BIGMAN にて放映。

岡山県



岡山駅地下改札口及び岡山駅東西連絡通路において、R4 年度結核予防週間ポスターを基に作成したデジタルサイネージ広告を掲出し、長期間にわたり県民に対して広く普及啓発を実施しました。

徳島県



あわぎんホール（徳島市）において「健康を考える県民のつどい」を開催し、コロナ禍ということで声掛けはできなかったが、ブースを設け募金箱を設置し、来場者を対象に募金活動を実施した。

京都府



JR 京都駅地下鉄連絡口

兵庫県



新型コロナウイルス感染拡大の影響で動画配信のみとなっていた「がん・結核セミナー」を感染防止対策を施した上で、3 年ぶりに集客で開催しました。

※この講演の動画は、10 月末から期間限定で当財団ホームページで公開します。

広島県



結核及びがんに関するポスターを展示するとともに、「結核の常識」を希望者に配付。複十字シール運動ポスターを掲示し、結核への理解と募金活動への普及を行った。

広島県庁正面玄関横「ふれあい広場」へも複十字シール運動ポスターを掲示し、リーフレットの配布と募金箱の設置を行った。

香川県



県内の結核・肺がん検診会場にて「結核の常識」等のパンフレットを受診者に配布し、結核予防週間の周知を行った。

支部・本部活動報告

都道府県	日付	開催数	係員	資材 点数	資材セット数	報告(1)場所・(2)配布資材・(3)活動内容等
北海道	9/22～9/30	4カ所	60 (内婦人団体 30名)	6点	1,500セット	1) 札幌市北区(3箇所)、中央区(1箇所) 2) 複十字シール小型、リーフレット、結核の常識、マスク、カットパン、COPD 啓発リーフレット 3) 結核と COPD 予防普及啓発キャンペーンを地下歩行空間で実施札幌市保健所と共催 内容: 結核・COPD 予防パネル展示、酸素飽和度測定、動画上映(本部作成) ・結核・COPD 予防パネル展の開催(健診センター待合室) ・婦人会の皆さんによる街頭募金
青森	9/10～9/11	1カ所	12 (内婦人会 4名)	5点	930セット	1) 盛運輸アリーナ(青森県営スケート場(青森市)) 2) 複十字シール、リーフレット、結核の常識 2022、がん検診受診勧奨用パンフレット、啓発用ティッシュ、風船を配布した。 3) 結核予防週間にあわせて当センター玄関ホールにリーフレット等を設置した結核予防啓発の為の小スペースを設置した。
岩手	① 9/1～9/30 ② 9/23 ③ 9/28	-	-	-	-	① 結核予防週間ポスターの掲出およびリーフレットの設置(自施設内ロビー、健診フロア) ② 岩手日報社会面に広告出稿 ③ NHK 盛岡放送局により結核について取材を受け、同日夕方ニュースにて放映された
宮城	① 9/1～9/30 ② 9/16～9/30 ③ 9/26～9/30	2カ所	2	3点	800セット	① 1) 市内 2カ所の診療所受付窓口 2) 結核の常識を配布 3) 結核パネルの展示、シール運動・禁煙リーフレットの設置、結核に関する動画を作成し放映した ② 1) 仙台市青葉通地下道展示ギャラリー 2) 広報資材の配布はなし 3) 結核、シール運動、受診勧奨のパネルを展示した ③ 1) 宮城県庁 1 階ロビー 2) 結核の常識、COPD、シール募金リーフレットを設置した
秋田	9/24 (10:40～12:40)	1カ所	32 (支部職員 15名・ 婦人会員 17名)	5点	500セット	1) 秋田県東西連絡自由通路「ぼほろへど」・秋田駅前仲小路(大屋根下) 2) リーフレット(結核の常識・複十字シール運動)・マスクケース・カットパン・ティッシュをビニール袋にセットしたものを配布。 3) 秋田駅東西連絡自由通路「ぼほろへど」から秋田駅前仲小路(大屋根下)にかけて、キャンペーンののぼりを設置。会場内にはパネルを設置し、キャンペーンの趣旨やポスター、パンフレット等を掲示。例年、ハンドマイクで複十字シール運動への協力の呼びかけをしていたが、今年度はレコーダーで録音したものを流した。小さい子供たちには風船をプレゼントし好評だった。コロナ禍での実施となったが、手指消毒を徹底し、大きな声での呼びかけを抑えるため、協力依頼のボードを掲げ、目でもわかるように募金の協力を訴えた。
山形	9/23・9/24	1カ所	14	12点	550セット	1) 9月23日(金)、9月24日(土)に開催されたやまがた健康フェア 2022(イオンモール天童、山形県総合運動公園)へ参画し、疾病予防に関する普及啓発を行った。 2) リーフレット(結核の常識 2022・複十字シール運動)・がん検診リーフレット・がん検診案内・ポケットティッシュ・ボールペン他 3) 大学の先生を招致し、プレスト・アウェアネスのシンポジウムを開催した。 ・無料骨密度測定を実施した。
福島	-	-	-	-	-	① 県内各所(市町村、保健所、事業所等)に結核予防週間パンフレット(2,400枚)やポスター(2,000枚)を配布し、普及啓発を行った。 ② 新聞広告: 結核予防週間に合わせ地方紙 2 紙で新聞広告を行い、結核について広く周知するとともに結核予防週間の PR を行った(9/23、9/24 付)。
茨城	9/24～9/30	-	-	① 2点	① 右記参照	① 各自治体、県医師会、教育委員会及び学校等に結核予防ポスターの掲示を依頼するとともに、パンフレット「結核の常識 2022」を配付した。(配布数: ポスター 1,100 枚 パンフレット 10,000 部) ② 茨城県及び市内市町村に依頼し、ホームページやツイッター等の SNS にて結核予防週間を周知した。(ホームページ: 掲載自治体数 29・SNS: 配信自治体数 23、延べ配信数 39 回(延べ 50 万人が受信)) ③ 当支部のホームページにて結核予防週間の周知及び結核健診の受診勧奨を実施した。
栃木	① 9/23 ② 9/24 ③ 9/26～9/30 ④ 9/26～9/30 ⑤ 9/1～9/30	① 1カ所 ②～④ 3カ所	① 11 (内支部 7名・ 婦人会 4名)	① 1点 ⑤ 2点	① 500セット ⑤ 右記参照	① 1) 宇都宮市内の商店街「オリオン通り」東武デパート前付近にて街頭キャンペーン実施 2) 複十字シール運動リーフレット、小型シール、シールぼうやのボールペン、付箋、ウェットティッシュ、募金案内、募金振込用紙 3) 展示等 ・結核に関するパネルの展示(8台) ・複十字風船の配布 ・「結核の常識」の配布 ② 地方新聞「下野新聞」2 面、読売新聞栃木版 27 面、朝日新聞栃木版の 27 面の半 3 段部分にモノクロで結核予防週間の告知を 1 回掲載した ③ 地方テレビ局「とちぎテレビ」にて結核予防週間および結核予防に関する告知 CM を制作し、10 回放送した。 ④ 地方ラジオ局「エフエム栃木(RADIO BERRY 76.4FM)」にて結核予防週間および結核予防に関する 60 秒告知 CM を制作し、10 回放送した。 ⑤ 栃木県、栃木県警および県内の市町、教育機関、医療機関、企業等に結核予防週間のポスター及びリーフレットを配布し、掲示・配布していただいた。 ・栃木県の健康増進施設である「とちぎ健康の森」人間ドック待合に結核予防週間のポスターを掲示したほか、健康情報提供コーナーにリーフレット・パンフレットを設置・配布した。
群馬	7/9	1カ所	2 (群馬県地域婦人団体連合会・群馬県健康づくり財団)	5点	200セット	1) 群馬県ぐんま男女共同参画センター 2) リーフレット(結核の常識)、小型シール、ハガキ、ボールペン、封筒組合せ 3) 結核予防週間前後に新聞広告を 2 紙(朝日新聞群馬版、上毛新聞)に掲載
埼玉	9/1～9/30	2カ所及び 県内全域	4,500	5点	4,500セット	① 懸垂幕の掲出: 9月12日～30日 埼玉県庁本庁舎に、結核予防週間に係る懸垂幕を掲出し、県民等へ結核の予防を呼びかけた。 ② 横断幕の掲出: 9月12日～30日 当支部施設のフェンス及び健診センターに、結核予防週間に係る横断幕を掲出し、受診者や来訪者、通行者等へ結核の予防を呼びかけた。 ③ 結核予防資材(ポスター・パンフレット等)の配付 県内医療機関、市町村、保健所、教育委員会等に結核予防週間ポスターを掲示していたが、広く県民等に結核の予防を呼びかけた。
千葉	9/10	1カ所	2	3点	250セット	1) イオンモール幕張新都心ホビーコート(同日開催のがん予防展に 1 ブースとして参加) 2) 複十字シール運動リーフレット、結核の常識 2022 等を配布した 3) 千葉県のマスコットキャラクター「チーバくん」・千葉市のシンボルキャラクター「ちはなちゃん」、当財団マスコットキャラクター「けんしー」を登場させ、啓発の呼びかけを行いました。

結核予防週間

都道府県	日付	開催数	係員	資材 点数	資材セット数	報告(1)場所・(2)配布資材・(3)活動内容等
東京	9/24 (13:00~16:00)	1カ所	13	5点	600セット	1) 秋葉原 UDX サボニウス広場 2)・3) 東京都の事業(若者を対象とした無料結核検診)と共催し、検査結果の即時判定が可能な胸部エックス線車(医師2名同乗)を配置して検診を行い、結核予防週間の周知を行った。 当日は台風15号の影響により時折強い風雨がある中で、「長引く咳は赤信音(東京都作成)」・「カットパン」・「シールぼうや付箋」・「シールぼうやボールペン」・「複十字シール運動リーフレット」をセットして配布し、結核予防週間のPRを行った。 東京都が行った【長引く、その咳 結核かも】の標語と沖田くん(キャラクター)の映像が、街頭ビジョンに放映され、通行人の関心を誘った。
神奈川	9/10 (10:00~11:00)	1カ所	23 (内神奈川県婦連 12名)	5点	1,000セット	1) 海老名駅自由通路並び海老名中央公園(活動時間10:00~11:00) 2) 結核の常識2022・複十字シール運動募金リーフレット・マスク・シールぼうや絆創膏・複十字シール(小型・キャラクター)2枚を袋に入れ、街頭で通行人に配布した。 3) コロナ禍での実施のため極力大声を出さない・白手袋をして資材を配布する、など感染防止に努め、安心して啓発資料を受け取ってもらえた。
山梨	-	-	-	-	-	新型コロナウイルス感染症拡大を受け、街頭キャンペーンを中止。県主催のイベントも中止となった。
長野	9/24~9/30	2カ所	-	2点	2セット	長野健康センターと伊那健康センターの受付に募金箱とリーフレットを設置し、普及広報活動を行った。
新潟	9/17	1カ所	5	2点	1セット	1) 新潟県長岡市アオーレ長岡 2) 結核の常識2022・複十字シール募金パンフレット 3) 本部から借用した結核の知識パネルの掲示し、簡単な結核クイズを実施。複十字シール募金の他、結核に関する知識を発信した。
富山	9/17	1カ所	13	3点	300セット	1) 富山市総曲輪グランドプラザ付近 2) 結核の常識2022・複十字シール、ボールペン、メモ帳、マスク 3) パルーンパフォーマンスによる路上パフォーマンスを行いお子様連れの家族にPRを図った。
石川	9/24	1カ所	2	3点	100セット	1) かなざわ健康プラザ大手町 2) 複十字シール運動リーフレット、結核の常識2022、ポケットティッシュを配布
福井	① 9/19~9/23 ② 9/15~9/27	2カ所	-	-	-	下記の場所に結核予防啓発ブース設置 ① 福井県庁1Fホール ② 若狭図書館学習センター
岐阜	① 9/22~10/3 ② 9/26~10/3 ③ 9/28~9/30	①② 2カ所 ③ 4回	①② 各2 ③ 3	①② 3点 ③ 3点	①② 200セット ③ 200セット	①② 1) ぎふ清流文化プラザ1F・ショッピングセンター「マーサ21」 2) 3) パネル展「あなたに知ってほしい"結核"のこと」を開催した。袋にパンフレット「結核の常識2022」・リーフレット「複十字シール運動」に啓発グッズ(不織布マスク)をまとめたものを配置し、自由に持ち帰ってもらった。 ③ 1) ぎふ清流文化プラザ 2) 3) 袋にパンフレット「結核の常識2022」・リーフレット「複十字シール運動」に啓発グッズ(不織布マスク)をまとめたものを配布した。不織布マスクが入っていることで多くの方に手を伸ばしていただけたように感じた。
静岡	-	1カ所	3	4点	100セット	1) 静岡市ふれあい健康増進館ゆらら 2) 結核の常識・リーフレット・ポケットティッシュ・絆創膏の広報資材を配布 3) 静岡市住民を対象とした胸部レントゲン検診を実施
愛知	① 9/24~9/30 ② 9/28	2カ所	各4	各2点	各50セット	① 昭和区永金町事務所にて、懸垂幕2枚を提示するとともに、来所者に「結核の常識2022」と「複十字シール運動リーフレット」を配布した。 ② 若宮市の総合体育文化センターにおいて実施した地域健康診の受診勧奨を目的とした講演会において、参加者に「結核の常識2022」と「複十字シール運動リーフレット」を配布した。
三重	9/21~9/30	3カ所	2	7点	100セット	① 当支部の社屋壁面に懸垂幕を掲げた。 ② 三重県立図書館において、結核予防週間ポスター及び複十字シール運動ポスターを掲示するとともに、結核の常識2022・複十字シール運動リーフレット、バンドエイド、クリアファイル、マスクを配布した。 ③ 地元のテレビ局において、検診の重要性、結核予防週間の周知及び結核の症状を周知するCMを2回放映した。 ④ 県、市町、医療機関、小中高等学校等に結核予防週間ポスター及び結核の常識2022を配付した。
滋賀	9/24~9/30	154カ所	-	5,195点	-	① 滋賀県、各市町、病院、学校、医師会他各関係団体に啓発物を配布した。 ② 滋賀県支部は健診センターを兼ねており、健診センター内や健診バスにポスターの掲示や受診者へパンフレットの配布を行った。
京都	① 9/26~10/2 ② 9/26~9/30	-	-	-	-	① JR京都駅地下鉄連絡口および地下鉄四軒駅改札外コンコースのデジタルサイネージに複十字シール運動PR広告を掲出 ② 当センター正面玄関に予防週間ポスターやリーフレットを設置し、受診者やその他来訪者へPR
大阪	右記参照	17カ所	43	10点 ※うちわ・ポケットティッシュ・エコバッグ・タオル(当法人オリジナルグッズ) 結核の常識・複十字シール運動リーフレット・ポスター・メモ帳・カットパン・シールぼうやや小型シール	-	① 「全国一斉複十字シール運動キャンペーン」(9月27日(火)) 1) JR天王寺駅中央コンコース付近(大阪市天王寺区) 2) ポケットティッシュ:3,000個・うちわ:150枚・カットパン:300個・シールぼうやや小型シール:1,000枚 3) 当法人職員と大阪市地域女性団体協議会会員の総勢18名と「シールぼうや」が、行き交う人等で賑わうJR天王寺駅中央コンコース付近で、結核予防啓発グッズを配布し、結核予防の普及啓発及び複十字シール募金の協力を呼びかけた。 ② 「結核予防週間・複十字シール運動キャンペーン」(8月1日(月)・23日(火)・9月8日(木)) 1) 当法人正面玄関前(大阪市中央区) 2) (ポケットティッシュ:300個・うちわ:100枚・メモ帳:60個・エコバッグ:60個) 3) 「結核をなくそう」等ののぼりを設置し、啓発グッズを配布することで結核予防週間の周知と複十字シール募金への協力を呼びかけた。 ③ 「結核予防週間啓発用CM 大型ビジョン放映」 1) トンボリステーション(大阪中央区:道頓堀)・BIGMAN(大阪市北区:梅田) 2) 結核予防週間周知としてCM(15秒)を制作し、トンボリステーションとBIGMAN(大型ビジョン)にて放映することにより普及啓発を行った。 放映期間:9月24日(土)~30日(金) 放映回数:(道頓堀)11:00~22:00 15秒×8~12回/時 (梅田)8:00~22:00 15秒×20回/日 ④ 「結核予防週間・複十字シール運動キャンペーン デジタルサイネージ」 1) JR天王寺駅構内4ヶ所 デジタルサイネージ 2) JR天王寺駅様のご厚意により、駅構内の4ヶ所に設置されている、デジタルサイネージに、当法人作製の結核予防週間普及啓発コンテンツを放映いただいた。 放映期間:9月14日(水)~30日(金) 放映回数:10秒×25~30回/時

結核予防週間

都道府県	日付	開催数	係員	資材 点数	資材セット数	報告(1)場所・(2)配布資材・(3)活動内容等
大阪						⑤「結核予防週間啓発用 CM 大阪モノレール車内モニター放映」 1) 大阪モノレール車内モニター 3) 大阪府との共催で、大阪空港から門真市にまたがる北大阪の主要な交通手段である「大阪モノレール」車内モニターに結核予防啓発の 30 秒動画(茨木保健所制作)を放映し、多くの府市民へ普及啓発を行った。 放映期間: 9月1日(木) ~ 30日(金) 放映回数: 30 秒×10 回/時 ⑥・大阪府・大阪市・堺市・東大阪市・高槻市・豊中市・枚方市・八尾市・寝屋川市・吹田市に結核の常識:13,200 部・ポスター:4,005 枚・ポケットティッシュ:26,650 個・うちわ:550 枚を配布。 ・大阪府内各医師会に、ポスター:7,885 枚を配布。 ・大阪府内各教育委員会に、結核の常識:2,320 部・ポスター:2,320 枚を配布。 ・当法人相談診療所・大阪複十字病院・堺複十字診療所に、結核の常識:550 部・ポスター:70 枚・ポケットティッシュ:9,000 個・うちわ:450 枚を配布。外来入院患者や健診受診者へ普及啓発を行った。 ⑦・当法人公式の Twitter を開設し、結核予防週間各行事の予告や実施風景写真等を掲載した。 ・当法人ホームページにおいて、本年度のグッズ、各行事のお知らせ等を掲載し、結核予防週間の周知を行った。 ・当法人作製のオリジナルパネルを正面玄関前に設置し、結核予防週間の周知を行った。 ・胸部健診車に啓発用マグネットシートを貼付し、出張健診先(12 カ所)にて啓発グッズ(ポケットティッシュ)を配布した。
兵庫	9/28	1 カ所	9 (他に県下支部職員 の応援あり)	2 点	120 セット	令和 4 年度がん・結核セミナー 1) 神戸ポートピアホテル大輪田の間(神戸市中央区) 2) 結核の常識 2022、複十字シール(小)を参加者全員に配付(協力いただいた方には封筒組み合わせ+ボールペン) ※募金額 5,900 円 3) 結核の講演、がんの講演以外に 10 分程度で兵庫県支部職員によるがん及び結核に関する事業説明と募金のお願いを行った。 その他、三宮センター街(神戸市中央区)の BOS ビジョンへ結核予防週間のスライドショー出稿を行いました
奈良	① 8/1 ~ 9/26 ② 9/24 ~ 9/30	① 3 カ所	① 25	① 3 ~ 5 点	① 約 1,250 セット	① 1) 県庁内で募金活動 2) 結核の常識、複十字シール運動リーフレット、セット封筒を使用して啓発及び募金活動を実施 (9/22・26) 2) 1) 奈良県医師会より会員様に配布及び手渡し 2) 複十字シール運動リーフレット、セット封筒を配布して啓発及び募金活動を実施。 結核の常識は医師会館窓口に配置して啓発活動を実施。(8/1・9/20) 3) 1) 健康を守る婦人の会より会員様に配布 2) 複十字シール運動リーフレット、セット封筒を使用して啓発活動を実施。 結核の常識の配布して啓発活動を実施予定 (8/21・9/22) ② 1) 結核予防週間中の保健所(奈良・郡山・中和・吉野) 2) 複十字シール運動、リーフレット、セット封筒、結核の常識を使用して啓発活動を実施 ③ 1) 奈良県医師会より会員様に配布依頼 2) 複十字シール運動、リーフレット、セット封筒、結核の常識を使用して啓発活動を実施 ④ 1) 健康を守る婦人の会より会員様に配布依頼 2) 複十字シール運動、リーフレット、セット封筒、結核の常識を使用して啓発活動を実施
和歌山	9/26	1 カ所	5	5 点	80 セット	1) 有田市民会館 2) 結核の常識・複十字シール運動パンフレット・マスク・ポケットティッシュ・健康の輪 3) 市民会館ロビーにて和歌山県健康を守る婦人の会役員と来場者へ広報資材を配布した。
鳥取	-	-	-	-	-	① 県や市町村、保健所へポスター、リーフレット(複十字シール運動、結核の常識)の送付、医療機関へポスターの送付 ② 結核予防週間に鳥取市内の大型電光掲示板による広報
島根	9/24 ~ 9/30	-	-	-	-	期間中、FM ラジオ(FM 山陰: 島根県ならびに鳥取県の全県下で放送)にて 1 日 3 本ずつ 20 秒 CM を放送した。
岡山	① 9/1 ~ 9/30 ② 9/19 ~ 9/30	2 カ所	-	① 8 点 ② 18 点	-	① 岡山駅地下改札口におけるデジタルサイネージ広告の掲出 ② 岡山駅東西連絡通路におけるデジタルサイネージ広告の掲出
広島	8/1 ~ 12/31	2 カ所	延べ 10	11 点	-	① 知事表敬訪問 副知事を表敬訪問し、結核の現状及び複十字シール運動の趣旨、県内の募金状況等を説明し、本運動への協力をお願いした。 ② ポスター・パネル展示 結核及びがんに関するポスター・パネルを展示。「結核の常識」を希望者に配布。複十字シール運動ポスターを掲示し、リーフレット・複十字シールと共に募金箱を設置し、結核への理解と募金活動への普及啓発を行った。 ③ 複十字シール募金箱設置 1) ・広島県健康福祉センター 1 階エントランスホール ・県庁正面玄関横「ふれあい広場」 ・健康福祉センター貸会場受付 ④ 広報資料配布 1) ・広島県健康福祉センター 1 階エントランスホール ・県内各市町 ・県内各関係機関(医師会・歯科医師会・婦人団体等) 2) がん征圧月間ポスター・禁煙ポスター・結核予防週間ポスター・複十字シール運動ポスター・その他関連ポスター・がん検診リーフレット・乳がんのセルフチェックリーフレット・乳がん検診とプレストアウェアネスリーフレット・結核の常識 2022
山口	① 8/1 ~ 8/31 ② 9/20 ~ 9/30 ③ 8/19	-	-	-	-	① 山口県総合保健会館 1 階ロビーで結核予防のパネル、ポスターを展示、パンフレット、リーフレットの配布を行った。 ② 県内 7 か所に設置されている山口県太陽光発電インフォメーションシステムで結核予防週間についての情報掲示を行った。 ③ 知事を表敬訪問し、結核の現状及び複十字シール運動の趣旨、予防における結核健診の重要性について説明し、本運動への協力をお願いした。
徳島	9/8	1 カ所	2	3 点	200 セット	1) あわぎんホール(徳島市) 2) 結核の常識 2022・複十字シール運動リーフレット・カットパン 3) 「健康を考える県民のつどい」開催時に、リーフレットを配布するとともに、募金箱を設置し募金活動を実施した。
香川	9/26	1 カ所	2	8 点	100 セット	1) 香川県高松市胸部検診会場 2) がん検診のチラシ 4 種・結核の常識・複十字シール運動リーフレット・マスク・ポケットティッシュ

結核予防週間

都道府県	日付	開催数	係員	資材 点数	資材セット数	報告(1)場所・(2)配布資材・(3)活動内容等
愛媛	9/14～9/16	1カ所	3名 (支部スタッフ1名& 愛媛県庁職員2名)	12点 (ライトアップ用カラー フィルム)	1セット	・左記日程において、愛媛県庁本館ドームを結核予防のシンボルカラーである赤色にライトアップ。 ・ライトアップの時間は、日没から22時。 ・プレスリリースや県庁ホームページ等を活用し、結核を正しく理解し予防するにはどうしたらよいかを考えていただくきっかけとして、また、感染症はコロナだけではないことも認識していただく意味も含めた啓発・周知を行なった。
高知	-	-	-	-	-	高知市街地にて街頭キャンペーンの実施を予定していたが、県内の新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑みて中止とした。
福岡	① 9/1～9/30 ② 9/24・9/25 ③ 9/22～9/30 ④ 9/22～9/30	4カ所	-	-	-	①西鉄電車車内ビジョン放映 西鉄電車の新型車両9000形の車内ビジョンを活用し、結核予防週間の動画を1か月間放映 ②福岡 PayPay ドーム大型ビジョン放映 福岡ソフトバンクホークスのホームゲームの際、大型ビジョンに結核予防週間キャンペーン開催について放映 ③福岡県庁ロビー展 福岡県庁の1階ロビーにて結核予防とがん予防の啓発活動としてポスターやパネルを展示。結核の常識等と併せてマスクをセットし、誰でも気軽に持ち帰りができるようにした ④懸垂幕の掲示 赤坂総合健診センターのビル側面に、結核予防週間キャンペーンの懸垂幕を掲示
佐賀	9/23	2カ所	25名	8点	2,000セット	1) 県内ショッピングセンター(イオンモール佐賀大和・ゆめタウン佐賀) 2) 結核の常識・複十字シール運動リーフレット・複十字シール・風船・マスクケース等を配布 3) 無料で健康相談や血圧測定などを実施し、当財団職員と県婦人会及び県庁職員の合同で結核予防及び募金の呼びかけを行った。
長崎	9/27	1カ所	7	3点	200セット	1) 諫早市本町商店街ポケットパーク 2) リーフレット・パンフレット・ポケットティッシュの3点をセットとして配布。 3) 募金をしてくださった方にはカットパン(シールぼうやイラスト入り)・シールぼうや付箋・複十字シール(小型)を配布した。
熊本	① 9/23 ② 9/27～10/27	2カ所	30	8点	500セット	① 1) 熊本市動植物園 2) 結核の常識・複十字シール運動リーフレット、複十字小型シール、啓発グッズ(ポケットカレンダー・絆創膏・うちわ) 3) 熊本県健康を守る婦人の会熊本市支部および熊本市感染症対策課及び健康づくり推進課の皆さまとの活動(保健師による健康相談(6名実施)・無料結核検診(7名)・マスコットキャラクター「そうぼくん」による記念撮影会 ※別途、肺がん模型展示、ポスター及び啓発用パネルの掲示 ② 1) 熊本市くまもと森都心プラザ図書館内展示 2) 結核の常識・複十字シール運動リーフレット、啓発グッズ(絆創膏・ポケットカレンダー・啓発用風船・結核予防啓発資料付きマスク(熊本市感染症対策課提供)) 3) 入口展示ケーススペースにて、肺がん模型及び啓発用パネルとポスターを掲示
大分	9/1～9/30	-	-	-	-	①大分県、市町村、保健所に結核予防週間ポスター・禁煙ポスターを配布し、掲示を依頼 ②県内保健所に結核の常識 2022 を1,000部送付し、来所者に配布
宮崎	7/15～9/30	2カ所	20	4点	500セット	① 1) イオンモール宮崎・イオンモール延岡 2) 複十字シール運動リーフレット・結核の常識・啓発マスク・サランラップ 3) 街頭キャンペーン その他、②新聞広告(4社)に啓発記事の掲載③複十字のガチャガチャを使用して募金を行っていることを記事でPRをする④街頭キャンペーンの取材
鹿児島	9/1～9/30	2カ所	2	2点 (ポスター約1600・ リーフレット約2300)		1) 鹿児島県庁内入り口、県民総合保健センター内2階 2) 結核予防週間ポスター(本部作成・鹿児島県作成)とリーフレット結核の常識を公共施設や商業施設、小中学校など400件以上の施設に送付 3) 今年度は鹿児島県庁入り口でパネルとのぼり旗の展示を行い、結核予防週間及び複十字シール運動の周知を図るとともに、結核への理解を呼びかけました。

令和4年度都道府県知事表敬訪問報告（続報）

8月1日の複十字シール運動開始にあたり各都道府県では、各県知事等を各県結核予防婦人会長ならびに支部役員等が訪問し、複十字シール運動への協力をお願いいたしました。前号に引き続き、表敬訪問を実施した支部のご報告を掲載いたします。

●岩手県



8/29、岩手県予防医学協会と岩手県地域婦人団体協議会は、達増拓也知事を表敬訪問しました。知事からは全国でも低い罹患率を達成している一助となっていることへの謝辞と、複十字シール運動への期待の言葉をいただきました。

●宮城県



8/23、池田宮城県副知事を渡辺理事長、鈴木会長（宮婦連健康を守る母の会）他役員が訪問。結核の現状等を説明し複十字シール運動への協力を要請しました。渡辺理事長からは新型コロナウイルス感染症の世界的流行は結核対策にも影響を与えていること、日本においても受診の自粛や健診の一時的中止の影響が患者発見の遅れや結核の重症化に繋がる可能性を懸念していること、継続的な普及啓発の重要性についてお伝えしました。池田副知事からは、本運動に対するご理解と今後の結核対策事業への取組みに対し「県においても結核の正しい知識や予防意識の普及啓発を強く推進していきたい」とのお言葉をいただきました。

●埼玉県



9/5、大野元裕埼玉県知事を当支部勝村直久専務理事ほか2名、埼玉県地域婦人会連合会柿沼トミ子会長ほか3名の計7名で訪問した。

勝村専務理事と柿沼会長から、複十字シール運動の概要、募金の実績、国・県の結核罹患率の動向等について説明を行い、複十字シール運動に対する県のご支援・ご協力についてお願いした。

●千葉県



8/2、井口保健医療担当部長を藤澤理事長が表敬訪問。

全国及び千葉県の結核の現状、新型コロナウイルス感染症の流行と新登録結核患者数への影響や募金状況について説明、複十字シール運動への協力をお願いした。

●神奈川県



8/26, 黒岩県知事を訪問し、山本理事長より複十字シール運動の概要説明と普及啓発活動へのご協力をお願いするとともに、結核の現状をご説明いたしました。

知事ご多忙のため短い時間ではありましたが、新型コロナウイルス感染症と同様に結核も空気感染する病気のため、注意すべき疾患であることと、この運動の主旨をご理解いただき、訪問が終了となりました。

●新潟県



8/19, 橋本副知事を表敬訪問。横山代表より陳情書を副知事に手渡し、国内外及び新潟県内の結核の現状について説明したほか、シール運動へのご協力をお願いした。新型コロナウイルス感染症の影響による健（検）診機会の減少や三密回避により、罹患率が低くなっていることなどをお伝えした。

●福井県



9/16, 酒井会長（福井県健康を守る女性の会）および岩壁支部長が、福井県健康福祉部長を訪問。事業の趣旨、結核の現状等を説明したうえで、複十字シール運動の意義・目的・現状を説明し、普及啓発の強化を各関係機関に対して働きかけていただくよう協力を依頼した。

●静岡県



8/24, 森副知事を萩原理事長、神山常務理事、静岡県結核予防婦人会の長野会長が訪問。結核の現状と県内での活動状況を報告、複十字シール運動への一層の協力をお願いした。森副知事から、「感染症に対して関心が高い時であるので、県としても結核の正しい知識や予防意識の普及啓発を推進していきたい。」とお言葉をいただいた。

●岐阜県



10/27、竹中会長から、新型コロナウイルス感染症の影響を受け市町のイベントが減少している中でも大切な活動は継続しなければいけないと地道な活動内容を報告した。大森副知事は、「結核の早期発見のためには啓発活動が重要である。一緒に啓発活動を進め、岐阜県の結核患者を減らしたい。」と応えられた。

●滋賀県



8/29、滋賀県地域女性団体連合会会長および副会長、支部役職員が訪問。支部長より結核の現状および複十字シール運動の今年度の実施計画について説明し、滋賀県地域女性団体連合会会長からは、結核予防婦人団体としての活動報告と募金活動の現状を話され、より一層の複十字シール運動へのご協力をお願いした。副知事より「結核は、昔の病気ではないということを今後も啓発活動を図り、県民の結核への関心を高めていく必要があります、県としても募金額の増加に向けて、複十字シール運動と合わせて協力していきます」とのお言葉をいただいた。

●広島県



8/23、田辺副知事を広島県支部の名越常務理事、広島県地域女性団体連絡協議会の弓場会長、広島市地域女性団体連絡協議会の山田会長の3名が訪問。結核の現状及び複十字シール運動の趣旨等を説明。本運動への協力をお願いした。新型コロナウイルス感染症が拡大する中での活動に、副知事より励ましのお言葉をいただいた。

●山口県



8/19、村岡副政山口県知事への表敬を行いました。
加藤理事長から知事に、山口県における更なる結核対策の推進を陳情致しました。続いて、藤家婦人会長から複十字シール運動の意義と目的について説明し、募金媒体と募金資材等を贈呈して、複十字シール運動への協力要請を行いました。知事からは「県の結核の現状を踏まえた結核の予防や撲滅対策にしっかり取り組むとともに、複十字シール運動への協力等やるべきことはやっていきたい」との言葉を頂きました。

新型コロナウイルス感染症の流行が続くなか、感染対策や都道府県ご担当者様と調整いただいた上で知事表敬訪問を実施いただきましたことを、誌面上ではございます、全国支部及び婦人会の皆様に御礼申し上げます。

国立病院機構奈良医療センター

副院長 玉置 伸二



はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大は当院にも大きな影響を及ぼした。当院は奈良県で唯一結核病床を有する施設であり、中核病院として積極的に結核診療に日々取り組んでいる。一方COVID-19に対しても重点医療機関として機能しており、結核病床30床に加えて、一般病棟から転換した34床でCOVID-19診療を行っている。

全国の結核罹患率（人口10万対）は2021年には9.2となっており、ついにわが国も低蔓延国となった。奈良県の罹患率は全国と比較して高い傾向にあったが、2021年には同様に9.2まで低下していた。当院においても結核の新規入院患者数は減少傾向となっているが、当初結核が疑われないため、重症化など進行してから入院となる症例も目立ってきた。今回はコロナ禍での当院における結核診療の現状と結核の地域医療連携を充実させるために取り組んでいる奈良県結核対策医師相談事業について概説する。

当院における結核診療の現状について

当院結核病棟への新規入院患者数は2018年105人、2019年143人と増加傾向となっていたが、COVID-19感染拡大を受け、2020年は90人と大きく減少し、2021年には97人となっている（図1）。奈良県及び全国においてもCOVID-19の感染拡大以降は結核の罹患率が低下しているが、これらには結核の発生率の真の

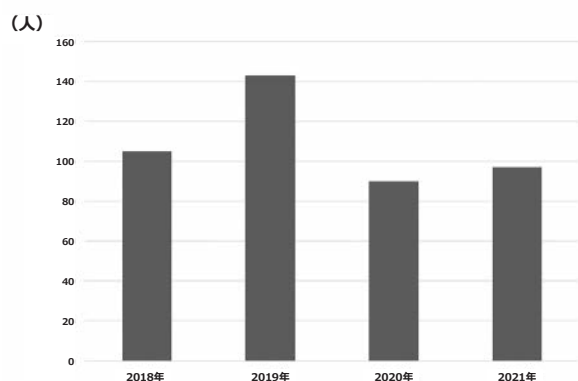


図1. 結核病棟への新規入院患者数の変動

減少に加えて、コロナ禍での患者側の要因としての受診控えや医療側の要因としての結核の診断の遅れなどが関与している可能性がある。このため今後の結核罹患率の動向には注視する必要がある。

2018年以降の年齢別の新規入院患者数をみると当院では高齢化が急速に進行しており、特に2019年は最も多い年齢層が90歳代であった（図2）。一方若年者では外国生まれ結核患者が増加しており、2018年以降昨年まで毎年3人、4人、6人、4人が新規入院となっており、その中には多剤耐性結核の症例も含まれていた。

当院でもCOVID-19の罹患後に結核を発症した症例やCOVID-19と結核との同時合併例などを多く経験するようになってきた。また患者側の受診控えにより多量排菌に至った気管支結核の症例や、診断の遅れにより呼吸不全に至った症例なども経験している。コロナ禍においても、医療従事者は結核を常に念頭において、正確に診断する方法を理解する必要があると思われる。

奈良県結核対策医師相談事業について

COVID-19の感染拡大以前より、奈良県では罹患率の低下とともに結核診療経験の乏しい医師・医療機関が増加し、診断の遅れや治療開始時点での重症化につながるものが危惧されていた。このため当院では県からの委託を受け「結核相談窓口」を2015年11月11日に開設した。正式には「結核対策医師相談・地域連携強化事業」として運営されており、医療従事者など結核対策に関わる職員からの相談に対し、メールまたはFAXで対応する形を取っている。本事業の内容については奈良県のホームページに掲載されている（<https://www.pref.nara.jp/53116.htm>）。相談は当院の地域連携室で受け付け、相談員である当方に内容が報告される。回答は原則一週間以内を目途に作成し、地域連携室から相談者及び奈良県医療政策部保健予防課に送付される。また奈良県には、毎月「結核相談事業実

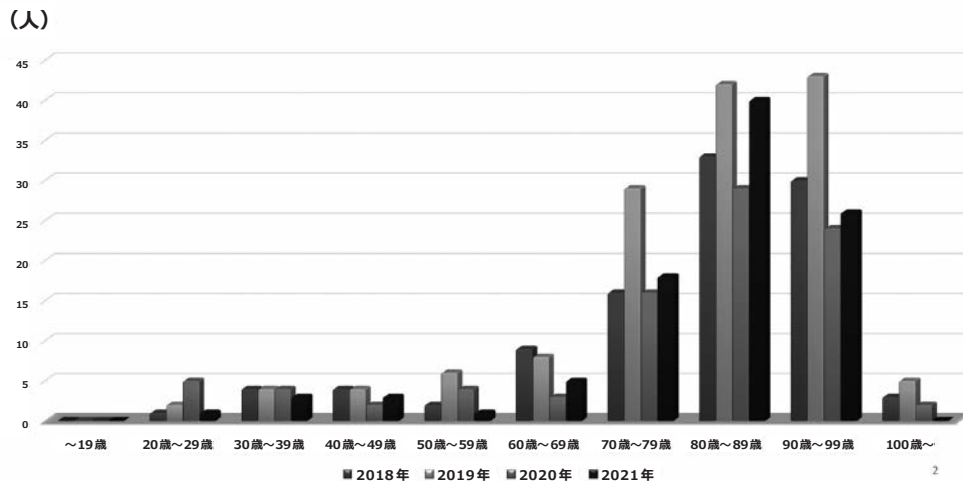


図2. 当院における年齢別結核新規入院患者数（2018～2021年）

績報告書」を提出することとなっている。

2022年3月までの相談件数は52件となっており、職種別の相談件数は、医師27件（勤務医26件、保健所医師1件）、看護師7件、保健師14件、薬剤師1件、臨床検査技師1件、その他2件となっている。

相談の内容は非常に多岐にわたっていた（図3）。項目としては耐性結核や合併症の管理など治療に関する相談が15件と最も多く、その他では診断方法について（3件）、インターフェロンγ遊離試験（IGRA）について（5件）、潜在性結核感染症（LTBI）治療について（7件）、接触者健診について（7件）、結核の感染管理について（5件）などであった。相談に対する回答には日本結核・非結核性抗酸菌症学会の各種委員会報告などの資料を添付するなどの工夫も行っている。

本事業には、奈良県における結核対策の「地域連携強化」のために「最新情報を提供すること」を目的として、医療機関に向けた結核の研修会等も含まれている。本事業の開始から医療機関へ出向いての研修会を現在まで計3回行っているが、コロナ禍においては今後Webでの開催等も検討する必要がある。

本事業についての活動はほぼ軌道に乗ってきてい

るが、特に2020年以降は相談件数も減少傾向となっている。コロナ禍において、また罹患率の低下により結核に対する医療関係者全般の関心の低下は否めない印象である。しかしコロナ禍であるからこそ「結核の診断の遅れ」をなくし、結核を正しく治療するために本事業を活用していくことは極めて重要であると考えられる。今後はより多くの医療関係者に結核相談窓口を利用して頂けるように、行政とも協力していく必要がある。

おわりに

近年のコロナ禍において結核の罹患率は低下しているが、結核に対する患者側の受診の遅れや医療側の診断の遅れが問題となっている。また当院の結核病棟では、退院基準を満たした高齢者の転院先の決定に難渋し、入院が長期化する事例が多くなっている。さらに当院ではCOVID-19の感染拡大以降、行政とのDOTSカンファレンスやコホート検討会などが十分行えていないのが現状である。今後は結核対策医師相談をさらに充実させ、行政及び医療機関と緊密に連携しながら、結核診療における地域連携体制の強化を目指していく必要があると考える。

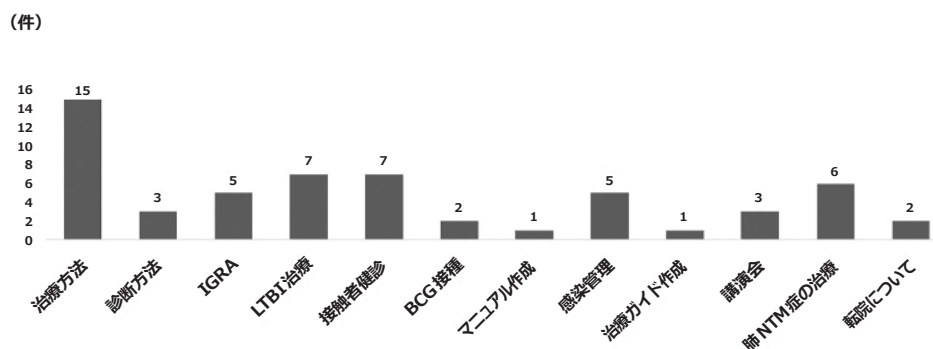


図3. 相談内容による分類

精神科領域に関連する結核症の問題と保健福祉分野との連携

東京都立松沢病院

阪下 健太郎

はじめに

筆者が勤務する東京都立松沢病院は、2022年7月1日に地方独立行政法人東京都立病院機構となったが、引き続き東京都が推進する精神科身体合併症医療の拠点として比較的重度の精神障害を持つ結核症患者の入院治療を行っている。活動性結核を発症した精神障害者は、集団感染由来の患者も散見される。精神科病院内で発生する結核症の問題を大きく分類すると、患者側の因子と医療体制側の因子の両方に起因する感染と発症の高いリスク、診断の遅れ、精神症状による検査や治療へのアドヒアランス不良等が垣間見られる。本稿では各因子を考察する。

1. 結核菌への感染と発症の高いリスク

精神障害者に結核感染と発症のリスクが高い患者側因子としては、高い喫煙率、糖尿病、慢性腎臓病、やせ、うつ病、薬物依存、アルコール依存症、貧困、ホームレス、精神医療へのアクセスが困難な外国人などが挙げられる。医療側因子は、精神科病院での年単位に及ぶ閉鎖空間での8人部屋や畳部屋などの大部屋での長期入院、精神科特例に起因する一般病床と比較した医療スタッフの相対的不足、相対的な身体医療への関心の低さ等が考えられる。前述の精神科特例とは、1948年の医療法施行令と1958年の厚生省事務連絡の通称である。これらは次官通知から70年以上変更されないまま現在に至る特例であり、精神障害を持つ患者の生命予後が薬物療法等の進歩によって改善し、精神障害を持つ患者の身体疾患の管理が重要となってきた実情にそぐわない特例である。具体的には、本特例によると精神科病床における医師数は一般病床の約3分の1で可、看護師数は一般病床の約3分の2で可とされている。本特例によって、精神科医療における患者長期収容型の精神医療、人件費を削った上での長期入院受け入れによる収益構造となる民間精神病院への精神科長期入院の依存が継続している。

事例1.50歳男性。排菌陰性化後も外来治療が困難と判断し入院中に社会調整を行った患者

30年前に来日し、飲食店勤務にて生計を立てていたイ

ンド出身の男性。受診5ヶ月前に失職した。その直後より食事をほとんど摂取せず日中から飲酒していた。受診1ヶ月前から咳嗽を認めた。受診3日前に酩酊状態にて自室で転倒し、頭部外傷のため総合病院を受診時、39℃台の発熱認め、胸部X線にて肺結核が疑われた。喀痰抗酸菌塗抹3+、結核菌核酸増幅法陽性となり確定診断。アルコール離脱せん妄が著明であり一般病棟での対応困難のため、主治医より保健所に相談が入り当院へ入院の打診となり、医療保護入院となった。アルコール離脱せん妄が著明で痙攣を繰り返し、経鼻胃管から抗結核薬を投与した。入院約1ヶ月後より経口摂取可能となり離床も可能となったが、退院欲求が強く、精神科加療の継続が必要で、退院後の服薬アドヒアランスが期待できず、保健所と協議の結果、6ヶ月間の全治療期間を入院加療とした。入院中に断酒プログラムを実施し、担当保健師やケースワーカーと共に、退院後の就職先を確保することで、再飲酒に至らない体制を整えた。退院後すぐに就労開始し、結核治療終了後のフォローアップ外来も定期受診している。

2. 診断の遅れ

精神障害者における結核診断の遅れに関する患者因子としては、就労率が相対的に低いため、会社の健診を受ける機会がなく、地域自治体健診を受けない傾向にあり、精神科通院のみの場合に健診を受ける機会を長期間逸しているといった例が見受けられる。精神疾患、知的障害、認知症などによって症状を上手く訴えることができないといった事例も多く、社会的弱者と言わざるを得ない。医療側因子としては、精神科領域に関与するスタッフが結核症に慣れないことも遅れの一因である。また、結核罹患率が減っていく中、鑑別疾患にも挙がりにくく、胸部X線や喀痰検査を行うことに長期間至らないこともある。中国において、良質喀痰を出せないという研究結果があり、患者自体から診断に必要な適正な喀痰が得られないという因子も関与している可能性がある。

事例2.60歳女性。診断が遅れ重症化し精神疾患のため、県内受け入れ先が無かった一例

知的障害にて10年前より某精神科病院に入院中、2ヶ月継続する38℃台の発熱があったが、解熱薬のみで対症療法とされていた。発熱が長期化するため精神科主治医が内科非常勤医に相談した。胸部X線にて肺野に粒状影を認め、粟粒結核の疑いとなり、喀痰の抗酸菌塗抹2+、結核菌核酸増幅法陽性となり、病院所在県内の結核病床への転院相談となった。しかし、県内に受け入れ先病院なく、越境にて当院へ勧告入院及び医療保護入院となった。身体的既往は2型糖尿病があった。転院3日前より意識障害を認め、来院時には体温39.0℃、意識はJCS-100と著明な意識障害と項部硬直を認め、粟粒結核に結核性髄膜炎の合併を疑い、転院直後に腰椎穿刺を施行した。髄液の抗酸菌塗抹陽性かつ結核菌核酸増幅法陽性であった。4剤標準療法に加え、結核性髄膜炎に対してデキサメタゾンを早急に開始した。治療経過中にピラジナミドによる肝障害やエタンプトールによる視神経炎を発症し治療中断や薬剤変更を2回行ったが、幸い薬剤感受性菌であったため、治療1ヶ月後に培養陰転化し、計18か月で治療完遂が可能と判断した。入院当初は、不穏やせん妄が著明であったが、ベッド柵にクッションを装着し、身体抑制は行わずに対応した。睡眠前のトラゾドン、不穏時に少量のリスペリドン内服にて精神症状の安定を図り、治療6ヶ月目に元の病院へ転院となり、近隣の総合病院の呼吸器内科に結核治療を継承した。結核の診断は呼吸器内科医でも時に難渋する。本例は診断の遅れがあり重症で有害事象も多数出現し専門知識も要した。閉鎖感染症病棟における濃厚な精神科併診による結核治療が可能な病院は首都圏でも殆どない。本分野の専門家が益々減っていく中で、都道府県レベルで政策的な設置を提案したい。

3. 診断や治療へのアドヒアランス不良・外来レベルでの保健所との連携

精神疾患や認知障害により診断や治療が困難な事例もある。専門機関への受診、各種検査、服薬継続困難である。排菌例も、結核病棟への入院を拒否または自己退院する事例もあるが、患者の意思を尊重しつつ、尊厳を保ちつつ治療を行うことを目標としたい。

事例紹介3. 30歳男性。保健所や往診クリニックとの連携にて外来加療が可能であった一例

統合失調症にて往診の精神科クリニックにて治療中であった。外傷にて総合病院を受診時に、胸部X線にて肺結核を疑われ、喀痰抗酸菌塗抹2+、結核菌核酸増幅法

陽性となり、F病院の結核病床に勧告入院した。入院当日に病室内で喫煙し強制退院させられた。管轄保健所から当院での外来治療の依頼があった。精神科は往診医にて診療継続を依頼し、症状が咳嗽のみで軽微であり、自宅も近いことから自転車通院とした。排菌中は担当保健師が毎回本人に同伴し来院した。時に精神症状が悪化し受診しない日は、保健師が処方のみを受け取り、ドア越しで健康確認し結核薬を届けた。DOTSは保健師が電話と薬殻確認で行ったが、1ヶ月経過し排菌が長引くため、外来主治医と保健師が相談し精神科往診クリニックの協力を得てスマートホン通話アプリを利用したオンラインDOTSを行いアドヒアランス良好であった。1ヶ月半で喀痰塗抹陰性および培養も陰性化し、近隣の内科クリニックへ結核治療を継承した。

結核集団感染対策への考察と保健所との連携に関する考察

精神障害者の身体医療、特に結核診療に関しては、全国的に臨床側の担い手が極めて少ない。これを補うべく、公衆衛生分野における感染症領域と精神保健福祉領域の連携と身体合併症医療との連携を促進し、早期診断治療が必要であり、排菌消失後の在宅ないしは一般病院への治療継承も円滑であることが期待される。排菌陽性例であっても服薬アドヒアランスや人権を重視し在宅治療も選択肢に挙がり、臨床側と保健所との連携が必須である。精神的にも結核診療的に入院が望ましいケースが少なからず存在し、精神疾患を合併する結核症患者を診療する専門施設の存続と専門医確保に行政からの支援も必須である。精神障害者は結核感染と発症のハイリスク群であることを広く認知してもらう啓発活動も重要である。結核集団感染は、COVID-19クラスターと同様、精神科病院の病院設備上、患者が密になりやすい特性や、少ない職員数も相まって、患者と医療者の双方向から診断の遅れや集団感染の長期化が生じる。COVID-19パンデミックにより精神科領域における感染制御の脆弱性がようやく認識された。公衆衛生分野と臨床側が密に協力し、結核の早期診断の啓発、積極的な定期健診、症状や胸部X線、喀痰検査、IGRAでのスクリーニング体制を推進する必要がある。

抗酸菌感染症におけるIL-17の関与と治療標的となる可能性について

国際医療福祉大学福岡薬学部薬学科

多田 納 豊

安田女子大学現代心理学科、看護学科
島根大学医学部

富岡 治明

はじめに

近年、多剤耐性結核や *Mycobacterium avium* complex (MAC) 症と言った難治性抗酸菌症が問題になっている。特に非結核性抗酸菌症患者は年々増加傾向にあり¹、治療の困難さが伺える。こうしたなか、抗酸菌症の治療には既存のものよりも強力な抗菌薬の開発が急務であるが、他方で、既存の抗菌薬の治療効果を側面から増強するような免疫補助剤を併用する治療方法の検討もまた、ある面より現実的である。本稿では、抗酸菌感染の際のIL-17の感染防御および病態悪化への関与について概説し、IL-17およびその産生細胞の一つであるTh17細胞の抗酸菌症の制御・治療標的としての可能性について考察したい。

抗酸菌感染症に対する宿主の感染防御システムへのIL-17/Th17細胞の関わり

抗酸菌に対する宿主の感染防御機構において、マクロファージ(MΦ)を主体とする細胞性免疫の活性化が不可欠であり、そのためには感染部位へのMΦの動員や、MΦを活性化するIFN- γ を産生するTh1細胞の動員と活性化が重要である²。そして近年、 $\gamma\delta$ T細胞やTh17細胞などにより産生されるIL-17が、単球・MΦの感染部位への動員やTh1細胞の機能亢進をはじめとする細胞性免疫の活性化において重要な役割を果たしている事が明らかになってきた^{2, 3}。

IL-17およびTh17細胞は、抗酸菌のみならず種々の細菌感染症に対する宿主抵抗性の発現に深く関わっているが^{2, 3}、主に結核菌を対象にした研究で得られた結果に基づき、抗酸菌感染時の宿主の感染防御システムにおけるIL-17の役割を纏めると、次の通りである。

抗酸菌の侵入時の宿主の初期応答として、 $\gamma\delta$ T細胞が反応する。 $\gamma\delta$ T細胞が産生するIL-17により、

周囲の非造血系細胞などからケモカインが産生・分泌される。これらのケモカインは、単球・MΦ、自然リンパ球ILC-3やT細胞を動員する。動員された単球・MΦは、間質性MΦとして感染部位に定着し、菌を貪食し排除する⁴。感染から2週間が経過する頃には、抗原特異的Th17が出現する。このTh17が産生するIL-17は、ケモカインの産生誘導を介して感染部位に好中球を動員する。好中球もMΦと同様に菌を貪食するが、抗酸菌に対する殺菌能はMΦに比して低く、好中球は自身の殺菌能で菌を排除するというよりも、アポトーシスをして細胞内の菌とともに自身がMΦに貪食されること(エフェロサイトーシス)で、MΦによる殺菌を仲介する⁵。加えて樹状細胞がエフェロサイトーシスすることで抗原特異的な免疫応答が増強される。

IL-17/Th17細胞の抗酸菌感染症の病態への関わり

Th17細胞が自己免疫疾患や慢性炎症疾患の病因となることはよく知られており、例えば、*M. avium* subsp. *paratuberculosis* 感染により発症するクローン病やI型糖尿病などの自己免疫症状の発現にもTh17細胞が関与するが⁶、近年、結核においても、IL-17/Th17細胞の病態悪化への関与が明らかになりつつある⁵。結核におけるIL-17/Th17細胞の過剰な誘導は、感染部位への大量の好中球の動員と、好中球に対するアポトーシス抑制を惹起する。この好中球が、抗酸菌の増殖の場(温床)となり、また、二次感染部位への拡散の原因となる⁷。さらに、好中球のアポトーシスの抑制はT細胞の活性化の遅延やネクローシスにともなう炎症の増悪化を招き、その結果、病態が悪化する^{5, 8}。

IL-17/Th17細胞を標的とした免疫補助療法薬の候補

近年、慢性閉塞性肺疾患における緑膿菌感染、ウイルス性の急性呼吸器感染症や、脊椎関節炎に対して、抗IL-17A抗体や抗IL-17受容体A抗体の使用による病態改善が報告されている⁹⁻¹¹。しかしながら、長期間を要する抗酸菌感染症の治療にあつては、免疫補助剤の投与も必然的に長期に及ぶものと考えられるため、過度の免疫抑制を招き、ひいては抗酸菌の感染拡大や他の病原体による感染リスクを考慮するならば、宿主の細胞性免疫を長期に亘って緩やかに調整出来る薬剤であることが望ましく、この条件に適うものとして、生薬や漢方薬が候補になり得ると考えられる。

結核をはじめとする抗酸菌症に対する免疫補助療法については、著者らの総説^{12, 13}に詳しく記載されているため本稿では概略に留めるが、種々の炎症性疾患モデルに対して各種漢方薬、薬用植物およびその有効成分（例えば、ウコンに含まれるcurcumin、オウゴンの根に含まれるbaicalin など）がIL-17/Th17細胞に対する抑制作用、ひいては抗炎症作用を示すことが報告されている。また、喘息の治療に使われているGubenfangxiao 処方によるアレルギー性炎症反応の軽減は、Th17細胞によるIL-17の分泌の減少に加えて、肺への好中球の遊走の抑制作用に基づくことを示唆する報告もある¹⁴。

IL-17/Th17細胞の抗酸菌感染症の治療標的としての可能性

上述のように、IL-17/Th17細胞は、抗酸菌感染症において、適切なタイミングや適量の発現により宿主の抵抗性に関与する一方で、過剰な発現・誘導が病態に悪影響を及ぼすことが示唆される。したがって、抗酸菌症の病状が悪化しているタイミングでは、IL-17/

Th17細胞の抑制による病態の緩和が期待できる。そして、生薬またはその有効成分には、IL-17/Th17細胞に対する抑制効果を示すものが多数認められており、そのような生薬等の使用・併用は、抗酸菌症の制御および抗菌薬治療の成功率の向上に資する可能性がある。しかしながら、全体的には基礎研究の質が十分に高いとは言い難く、今後の研究のさらなる展開を期待したい。

参考文献:

- 1) Namkoong H, *et al.* Emerg Infect Dis. 2016; 22: 1116-7.
- 2) Lyadova IV, Pantelev AV. Mediators Inflamm. 2015; 854507.
- 3) Li Y, *et al.* Mediators Inflamm. 2018; 6587296.
- 4) Huang L, *et al.* J Exp Med. 2018; 215: 1135-52.
- 5) Ravesloot-Chávez MM, *et al.* Annu Rev Immunol. 2021; 39: 611-37.
- 6) Brand S. Gut 2009; 58: 1152-67.
- 7) Lowe DM, *et al.* Trends Immunol. 2012; 33: 14-25.
- 8) Parker HA, *et al.* Front Immunol. 2021; 12: 782495.
- 9) Ding F, *et al.* Front Immunol. 2021; 12: 811803.
- 10) Liu X, *et al.* Respirology. 2021; 26: 1049-59.
- 11) Kim TH, *et al.* Rheumatology. 2022; keac522.
- 12) Tomioka H. Am J Chinese Med. 2017; 45: 1-15.
- 13) 多田納豊、富岡治明ら。結核。2022; 97: 229-37.
- 14) Ruan G, *et al.* Exp Ther Med. 2016; 12: 1428-34.

フィリピンでの結核対策 —結核検診の強化と統計データの活用推進

ユニバーシティカレッジロンドン
国際保健研究所・博士課程

濱田 洋平

私は2018年9月から1年間、日本国際協力機構（JICA）からフィリピン保健省の結核部門に結核対策アドバイザーとして派遣されていました。今回は、フィリピンの結核対策や、派遣中の活動を少し紹介したいと思います。

フィリピンの結核蔓延はとても深刻で、世界保健機関（WHO）の推計によると2018年の新規患者数は人口10万当たり554人でした。これは人口当たりの患者数では南アフリカ、レソトに次ぐ世界第3位で、アジアでは第1位です。1年間に約60万人が結核を発症し、毎年3万人近い人々が結核により命を落としていると推計されています。このような結核蔓延の要因として、高い人口密度や貧困、換気が悪く密集した住宅事情などが関わっていると考えられています。

さらに、結核対策における大きな問題点の一つが結核患者の多くが見つかっていない、あるいは報告されていないことです。先ほどの推計患者数約60万人に対して、2018年の保健省に報告者された患者数は約37万人で、約40%の患者が報告されていません。これは、結核患者が診断されていないため見つかっていないことと、民間病院で診断、治療されている患者が報告されていないことの両方が原因として考えられています。この推計患者数と報告者数の乖離の大きさを政府も深刻に受け止め、2018年に策定された新たな結核対策の戦略では、患者発見の強化に重点が置かれました。さらに、2018年の国連総会結核ハイレベル会合では保健大臣が5年間で250万人の結核患者を診断・治療すると宣言しました。

結核検診の強化

このような中、フィリピンでは米国や世界基金の支援を受けて、結核検診の強化に取り組んでいました。従来の体制では咳などの症状を自覚した患者が自ら医療機関を受診し、喀痰の顕微鏡検査で診断される必要があります。しかし、この流れには①症状があっても受診しない、②症状がない結核患者の存在（国の結核有病率調査によると約半数の結核患者が無症状）、③顕

微鏡検査では見逃しが多いといった複数の問題があります。これらの問題を克服するために、車にレントゲンと顕微鏡より見逃しが少ない結核遺伝子検査（Gene Xpert）を搭載し、各地で検診を行うというプロジェクトを推進していました。一方、レントゲンを撮影するとその場でレントゲン画像を読影できる医師が必要です。同じような検診車を使う方法は以前からも行われていたのですが、一部の地域ではレントゲン画像を後日放射線科医に読影してもらい、レントゲンで結核が疑われた患者を別の日に改めて喀痰を採取するというプロセスがとられていました。これでは非効率的です。そこで、新たなプロジェクトでは人工知能（AI）を応用してレントゲン画像を自動的に読影するシステムを用いました。人工知能を活用した読影システムは放射線科医と同等の読影の正確さで、瞬時に画像を解析することが可能です。これによって、検診受診当日に読影と喀痰採取、検査結果の返却まで行うことが可能となります。

患者発見を強化するためにはこのような結核検診を全国的に展開していく必要があります。目標とする患者発見率に近づけるために、どのくらいの人数を検診してどのくらいの患者を見つけることができるかを考慮しながら計画を立てていくことが必要です。しかしながら、私が着任時点の会議での議論を見ると、地方レベルではこのような計画の立て方がとられておりませんでした。

そこで、何人に検診すると何人くらいの結核患者が見つかりそうかを簡便にウェブ上で計算できるツールを作りました。元々 WHOが同様のツールを公開していたのですが（https://wpro.shinyapps.io/screen_tb/）、地方の結核担当官でも使用できるように簡略化し、できるだけフィリピン国内のデータを反映させました。これによって、例えば糖尿病を有する人1万人にレントゲンで検診すると何人の結核患者が見つかるかを推定することができます。対象となる集団、検診方法、人数などを自由に設定し、結核検診の実施計画に用いるこ

とができます。この使い方を広めるワークショップを各地で行ったところ、各地域が立てた予定検診者数では患者発見の大きな改善が望めないことがわかりました。これを基に検診人数の増加や、より多くの人々に検診してもらうための戦略などの議論をしてもらうことができました。

図1. 結核検診で見つかる患者数を推定するためのウェブ上の計算機

結核統計データの活用推進へ

フィリピンでは、公的な結核クリニックがそれぞれ電子化されたシステムに患者情報を入力することで、全国各地の患者数などの結核に関する統計情報を収集しています。私がアドバイザーとして着任した際の支援目標として、このデータの分析、活用能力を向上させるというものがありました。この結核統計データは四半期ごとに各郡、州の結核担当官が集計し、グラフなどを作成して対策の成果の確認、戦略の見直しを話し合う会議が開催されていました。各州にはそれぞれ結核のデータを分析する担当官がいます。彼ら自身にデータ分析をトレーニングすることも可能でしたが、そもそも通常業務が忙しく、もっと頻繁にデータの分析をしたり、より見やすいグラフやマップなどを作成する余裕がありませんでした。また、トレーニングしてもその担当官が異動してしまう可能性があります。そこで、日々収集されるデータを、自動的にグラフやマップで表示する「データダッシュボード」の作成を、WHOと共同で行いました。ダッシュボードの活用で対策の進捗をリアルタイムにかつ簡便に把握し、必要に応じた戦略の見直しをより頻繁にできるようにすることが狙いです。

ダッシュボードとは重要なデータがグラフなどで一目でわかりやすく確認できるツールのことです。図2は我々が作成したダッシュボードの1画面です。結核治療を開始する患者数の月ごとの目標と、実際の報告者数が一目わかります。これが日々のデータで自動的に更新されます。その他のデータ、例えば結核検査数や

HIV陽性率、治療成績などのデータや地域ごとのデータも簡単に選択でき、マップで表示することも可能です。さらにデータの解釈の注意点なども確認したり、各州の目標達成率に応じた順位表をみたりできます。

このようなツールがあれば、政府の結核担当官が自分でグラフを作成する手間を省き、数回クリックするだけで簡単にデータを確認できるので、データの解釈とそれに基づくアクションの立案に集中することができます。JICAの専門家としての任期中はこのダッシュボードの作成とその使用方法、データの解釈についてのワークショップを各地で行いました。さらに、このダッシュボードはインターネット上に公開されているので誰にでもアクセスができます (<https://racetb.doh.gov.ph/>)。データを公開することで市民、マスコミ、政治家などが気軽に政府の対策の進捗を見れるようにし、より結核対策に関心を持ってもらいたいと考えました。そこで、在任中にはマニラ市長も訪問し、このツールの売り込みを行いました。

新型コロナウイルス感染症の流行が始まってからも似たようなツールが広まったのをご存じの方も多いかと思います。それまでは、結核やその他の感染症データが途上国を含めた世界各国で逐一公開されるということはあまりみられませんでした。データをこのような形で一般に公開することに抵抗を持つ国もありました。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行によって状況が大きく変わり、結核プログラムが長年持つことができなかつたリアルタイムのダッシュボードが新型コロナウイルス感染症についてはあっという間に広がるのを見るのは複雑な気持ちでした。しかし、これを機会にデータの公開とダッシュボードの有用さについて理解が進み、結核データについても同じような取り組みが各国で広まる契機になることを期待しています。

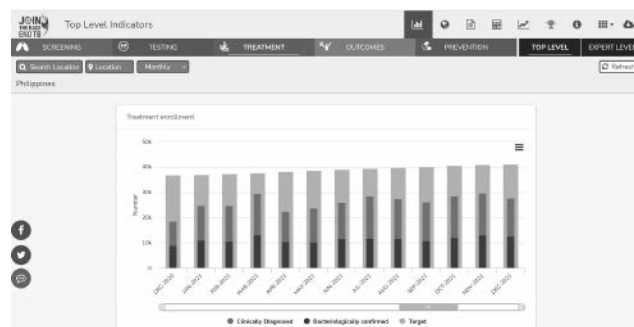


図2. フィリピンの結核データダッシュボード

昭和20年代の療養生活—中村勝治氏のアルバム

結核予防会

代表理事 工藤 翔二

表紙に「東療の想ひ出」(其の一), (其の二)と記された2冊のアルバムは, 70年余にわたって国立病院機構東京病院の名誉院長室に保管されていたものである。

撮影者は, 昭和24年5月から昭和27年1月まで, 東京療養所(東京病院の前身)で療養されていた中村勝

治氏である。100枚を超える写真には, 共に過ごした療友やそれを支えた医師・看護師など, 当時の療養所生活の姿が生き生きと記録されており, 生に向かう人々の絆と歓びさえ伝わってくる。

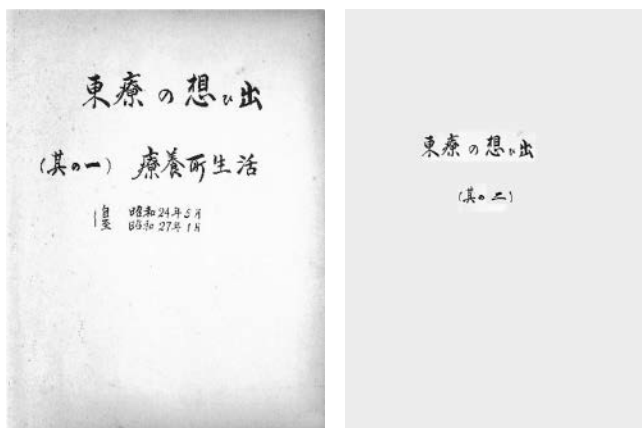
当時の入院台帳が残されていない中で, アルバムに記された氏名だけから撮影者中村勝治氏(以下, 氏)の来歴に辿りついた経過も一編のドラマではあるが, 本稿の趣旨から外れるので割愛する。

氏は, 東京帝国大学工学部で航空工学を学び, 昭和9年卒業後に中島飛行機に入社し, 真珠湾攻撃の主力であった九七式艦上攻撃機的设计主務を務められた。中島飛行機在職中に結核を発病し, 戦後になって東京療養所に入所して, このアルバムを自身の記録として残された。

写真集にみる当時の療養生活

氏の療養所入所後最初の写真(昭和24年5月)には, 「中村(38歳)」とある。南3寮6番室という大部屋が氏の病室であった。間もなく胸郭成形術を受けた。手術直前の写真には, 同室の療友や看護師, 付添婦らに囲まれる氏の笑顔がある。

手術を控えた療友の励ましだけでなく, 回復して外気舎に移るときや, 退院の時など, 頻回に記念の集合写真が残されている。



アルバム「東療の想ひ出」



撮影者特定の契機となった写真



胸郭成形手術の前に記念写真

大気・安静・栄養を柱とする療養所の窓は大きく開け放たれ、冬は寒い。コスモスの残る晩秋から早朝の焚火は日課であった。

療養所にはたくさんのクラブや同好会があった。「一高会」、「五中会」などの同門会はもとより、俳句班（機関紙『松濤』）、短歌会（『古今』）、成人文化講座、ロシア語講習会、碁・将棋、写真班（『光陽クラブ』）、ピアノ班、園芸班など枚挙にいとまがない。そこには、素人の同好の士だけでなく、その道のプロもまた患者であった。写真集には、私も知る俳人石田波郷の姿も“先生”敬称をつけて写されている。



早朝の焚火



ベッドの上で『へぼ将棋』（ママ）

たくさんの写真には、療友一人ひとりの姿がその名前だけでなくコメントを付けて残されている。意外に思うのは、女性患者も“ガールフレンド”と称して同じように登場することである。女性患者にはしばしば、（後の〇〇氏夫人）というコメントが添えられている。多くは療養中に若い療友同士のロマンスが生まれたのだろう。右上の写真は、お向かいの病室の女性患者さ



5 寮 2 番室〇さんの退所のお祝い



石田波郷さんも療友であった

んの退所祝いの光景である。

まるで、映画『青い山脈』の一コマを見るような左上の写真には、「きんらん、ぎんらんの花を摘みに野火止川をこえて、黒目川の丘をハイキングした折」とコメントが添えてある。

この写真集でなにより癒されるのは、2年半にわたる療養生活のスナップ一枚一枚に、闘病の辛さを感じさせる暗さがみられないことである。闘病仲間はもちろん、看護師や付添婦との交流と笑顔、柳瀬川や野火止用水など近隣散歩の写真からは、結核療養の楽しささえ感じられる。戦争をくぐり抜け、新しい世の中を手にした希望が投影しているのかもしれない。軽快し

て退院する患者を見送る喜びの人々にも、亡くなった療友を裏門から見送る悲しみの人々にも、療養生活を共にした同志のような感情がうかがわれる。これは、藤沢周平の『半生の記』（文春文庫）に書かれた彼の闘病生活（昭和26年に発病、保生園（現在の新山手病院）で手術）でも感じたことである。

氏は、アルバムの添え書きの中で、このように書いている。「結核の療養所生活は期間が長い。2年、3年、長い人になると5年、10年を超す人もいる。そこでは、あらゆる階層の人が、一般社会から離れて、寝食を共に暮らしている。そこで、思想・修養・趣味・娯楽・其他いろいろのグループが数多く結成され、映画、講演会等の催し物も多く、患者は患者なりに心の慰めを満たし合っている。まさに、ここはひとつの社会である。」

氏も多くの患者と同じように、回復して広大な敷地内に点在する「外気舎」とよばれる患者2人で居住す



黒目川の丘にて



亡くなった療友を裏門から見送る



外気舎の前で自炊

る小屋に移った。外気舎に移ることは、退院間近を意味しており、患者にとって喜びであった。前頁右下の写真は、外気舎の前で、同室の療友と一緒に自炊する姿である。多くの療養所にあった外気舎は、ほとんど



退所の前に狭い外気舎で“ガールフレンド”たちと

現存せず、唯一、国立病院機構東京病院に一棟が保存されている。こうして氏は昭和27年1月、めでたく退院された。

氏は、退院後、中島飛行機を前身とする富士重工業株式会社（現在の株式会社SUBARU（スバル））に身を置かれ、スバル自動車顧問、神奈川スバル自動車（株）監査役等を務められた。

本アルバムは、氏の著作の印税振込先を辿ってアルバムにも写る御長女（当時小学5年生）に返却された。その折に、本アルバムの結核史における重要性に鑑みて、資料としての複製と公開の了承を得た。複製版は、結核予防会結核研究所、国立病院機構東京病院、清瀬市立郷土博物館に保管されている。

最後にアルバムにある当時（昭和26年頃）の『結核研究所』、『小児結核療養所』の写真を添える。🐱



昭和26年頃の結核研究所と東京都立小児結核療養所の子どもたち（撮影者：中村勝治氏）
註：東京都立清瀬小児結核療養所（昭和23年11月設立、昭和28年11月に東京都立清瀬小児結核療養所に改称、後の東京都立清瀬小児病院。中村氏のキャプションでは療養所とされているが、撮影年から療養所とした。

日本の結核対策の歴史から 新型コロナウイルス感染症を考える(後編)

東京都立多摩北部医療センター

呼吸器内科臨床顧問 藤田 明

前編の最後で、開業医を中心とする医療体系に結核患者の診療を委託する戦後の結核対策の方式について紹介したが、それがうまく機能した背景は、結核医療基準の設定、それに合致する医療への公費負担の実施、それを審査するための結核診査協議会の設置、保健師による訪問活動などであったと、島尾忠男先生は書かれている。生活水準の向上、結核化学療法の進歩、集団健診やBCG接種の普及が結核罹患率の減少に大きく寄与したことは言うまでもないが、それを支える仕組みが対策の成否を握っていたということではないだろうか。

結核と新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の発生動向について時間軸を一緒に比較出来ないが、COVID-19はパンデミックが始まってから3年近く経ち未知の感染症ではなくなった。より多くの開業医がCOVID-19の診療に関わるようになっていく。それでも2022年夏の「第7波」において、病床の確保・運用、発熱外来や救急搬送、COVID-19以外の医療の継続など、「第6波」以前からの医療提供に関する課題が改めて浮き彫りになった。

話はもどるが、前編で紹介した田澤鐐二先生は当時、結核施設を大きく5つに分類し、「重要な点はこれ等施設の緊密な連携と、活動力の均衡である」と記述している*。「公立肺結核療養所創設当時には患者の大部分が皆重症者で死亡者が続出し陰惨な様相を呈し」「東京市療養所においては・・・1936年の時点では入院待機日数は男294日、女312日」「病床不足の声巷に喧しきに至ったがその後次第に委託病床を増すに従い・・・どこでも可いと言えば・・・直ちに入所せしめ得るに至り」と、当初は著しく不足していた療養所の病床数は、1940年の時点で東京においては充足されたようである。しかし、田澤先生は患者の軽症化に対応する外来施設の整備は、

療養所や委託病院の後であり、妊婦、精神病患者等の特殊施設やアフターケアの施設は少ない、と指摘した。日本のCOVID-19医療供給体制に類似した課題が結核対策の歴史においても経験されていたのである。COVID-19医療を円滑に進めるキーワードは、田澤先生が指摘されたように「連携」と「均衡」であり、戦後の結核対策にみたようにバックボーンとなる各システムが有機的に機能することであろう。

ところで、清瀬市郷土博物館で展示「結核療養と清瀬」(協力：結核研究所、NHO東京病院)が本年7月まで開催されていたので、ご覧になられた方もいらっしゃると思う。昭和初期には、結核予防のための啓発無声映画や結核予防歌、紙芝居「結核裁判」などが制作され、現代とは媒体の違いはあるにせよ活発に啓発がおこなわれていた。一方、CNNのスペイン風邪に関する番組(2020年12月20日放送)を見た時に、「KEEP YOUR BED ROOM WINDOWS OPEN! PREVENT INFLUENZA-PNEUMONIA- TUBERCULOSIS」(Anti-Tuberculosis League Board of Health)と書かれたポスターの映像を確認した。約100年前に結核の予防も含め換気が啓発されていたのである。翻って、今回よく使われるようになった「三密」は結核感染のリスクでもあることは広く知られているのだろうか。

以上、私的な一考察として結核対策の歴史とCOVID-19の状況を見比べながら述べてみた。この間のテクノロジーの進歩はすばらしいものがあるが、COVID-19対策において結核対策の歴史からも学ぶべきことがあると感じた。🐼

* 1942年の日本結核病学会総会特別講演を戦後の1955年に日本結核病学会誌「結核」に4編の論文として掲載(著者名を田沢鐐二と表記)

コロナ禍における防災対策ワンポイント・アドバイス

第4回 命を守り、暮らしを支える 「災害情報」

災害救援ボランティア推進委員会
災害支援・防災教育コーディネーター／社会福祉士
JATA 災害時支援協力者研修講師

宮崎 賢哉

本シリーズでは「コロナ禍における防災対策」をテーマとして、各支部職場や家庭ですぐに役立つワンポイント・アドバイスをご紹介します。今回は「災害情報」についての紹介です。

● スマートフォンの普及で大きく変わる「災害時の情報収集と伝達」

「新型コロナウイルス感染症に関する情報流通調査報告書（総務省,2020）」によると、10代のおよそ半数がLINE NEWSやTwitterといったスマートフォンアプリを中心に災害情報を収集しています。スマートフォンが暮らしに浸透することで、災害情報が身近になり、命を守り暮らしを支えるために必要な情報が迅速に得られたり、伝えられたりするようになりました。一方で、情報量で格差が生まれたり、誤解やデマによる混乱・トラブルが起きたりするといった課題があります。

● 災害情報収集のポイント～情報を行動に変換しよう～

第2回「ハザードマップ」でも触れましたが、様々な情報はそれだけでは意味を持ちません。何らかの行動につなげる必要があります。図1は内閣府が公開している「警戒レベル」についてのお知らせです。重要なのはこうした情報を得たときに「行動に変換するスイッチ」を入れることです。警戒レベル3/高齢者等避難を見聞きしたら「すぐに〇〇する」といった、情報の理解と行動をセットで備える必要があります。

● 災害情報伝達のポイント～事実・伝聞・意見に整理しよう～

災害情報を得て行動するのですが、その時に「この情

報を誰か（家族・友人・会社等）に伝えなければ」という場面もあります。そんな時に意識していただきたいのが図2で示す「3つの箱」です。

▼災害情報は「事実」かどうかを確認する （平時の情報収集や議論でも使えるテクニック）

デマや誤解
の対策に!!

事実 の箱

誰が見ても同じで、明らかにすること。何らかの形で証明ができること。



伝聞 の箱

人から聞いたが、確認はしていないこと。～らしい。～と聞いた、言っているなど。



意見 の箱

主観的・感情的なこと。大小、多少、善悪など形容詞がつくことが多い。



図 2.

例えば「私の家は川が近いけど、これまで水が来たことなんてないから、大丈夫」と誰かに伝えようと思ったとします。「水が来たことはないから大丈夫（だと思う）」というのは個人的な意見や感想です。重要なのは「川が近い」という事実です。災害から命や暮らしを守るための行動は「事実」に基づくことが大切です。

同じ避難をしないという判断を伝えるなら「川は近いけど高台にあるし、ハザードマップでも明らかに危険がない地域だから、在宅避難にする」といった事実を明らかにすることで、伝える側も受ける側も、正確な情報を得ることができます。

● 日頃からリテラシー（情報を読み解く力・伝える力） を高めることを意識して

筆者は上記のような点を災害ボランティアの教育訓練でも強調しています。活動経験上、災害対応現場における失敗やトラブルの多くはコミュニケーションのミス（言った・言わない、先入観、勘違い、価値観等）に起因することが多かったからです。また、SNSとの付き合い方ではデマや過大な表現などを見極める力も必要となります。図2の「3つの箱」は日常の情報収集伝達や議論でも使えるテクニックなので活用していただき、日頃から災害情報リテラシーを高めることを意識するようにしてください。



図 1.

支部長だより

結核予防会支部長に就任された方にご挨拶をご寄稿いただき、本コーナーに掲載いたします。



支部長就任のご挨拶

公益財団法人和歌山県民総合健診センター

理事長 富松 栄三

令和3年7月より公益財団法人和歌山県民総合健診センター理事長に就任するとともに、結核予防会和歌山県支部長に就任いたしました。よろしくお願い申し上げます。

当センターは、昭和60年に設立以来、県民の健康保持増進を図るため、結核、がん、生活習慣病など各種疾病予防のための健診事業、普及啓発事業等を行い、県内の中核的な健診機関として、公衆衛生の向上と県民の健康水準の増進に役立つよう取り組んでまいりました。

本県における結核の状況は、年々新規患者数は減少しているものの、令和3年において新規患者数が89人であり、罹患率(人口10万対)は9.7と全国平均を上回っています。

また、患者の高齢化が進んでおり、65歳以上の高齢者の占める割合は73%、80歳以上の占める割合が52%と80歳以上の患者が半数を超えています。

このため、県・市町村・保健所・婦人団体など関係機関と連携を図り、結核予防の普及啓発活動を行うほか、リフト付き胸部検診車による特別養護老人ホーム入所者に対する健診を積極的に実施するなど受診者の拡大に努めています。

結核をはじめとする各種疾病の予防には、健康診断による早期発見が何より大切です。

コロナ禍による受診控えがここ2年間続きましたが、幸いにも徐々に回復基調にあり、令和4年においてはコロナ前の受診者数に戻りつつあります。

今後とも、より一層、健診の重要性を訴え受診率向上に努め、県民の健康づくりに貢献してまいりたいと考えてございますので、関係の皆様方には引き続きご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げますとともに、結核予防会の益々のご発展を祈念いたしまして就任のご挨拶とさせていただきます。🍀



理事長就任に当たって

公益財団法人鳥取県保健事業団

理事長 平尾 正人

令和3年6月より公益財団法人鳥取県保健事業団理事長に就任いたしました。よろしくお願い申し上げます。当事業団の歴史を振り返りますと、昭和52年4月に財団法人鳥取県保健事業団として設立され、同年5月に日本対がん協会の鳥取県支部、8月に予防医学事業中央会の鳥取県支部として認定されました。その後、結核健診、各種がん検診、企業健診、学校健診へと事業を拡大し、同時に水質検査をはじめとする環境測定も手掛けるようになり、平成25年に公益財団法人の認定を受けたのを機に「公益財団法人鳥取県保健事業団」と名称を変更しました。現在では鳥取県東部に総合保健センターと健診センター、中部と西部に健康管理センターを設置して「全ての鳥取県民が健康で活力

ある生活を送れるよう、公衆衛生の向上に寄与する」という理念のもと、鳥取県内全域を対象として健診と環境検査事業を展開しております。

鳥取県の結核患者の現状ですが、この10年間での新規患者数の届け出は毎年減少傾向にあり、令和3年度は38名の新規届け出数でしたが、前年に比べ若干増加していました。人口10万人当たりの罹患率は6.9で全国平均よりは低いようですが、そのうち65歳以上の高齢者の占める割合は約7割と全国と同様に多く、今後とも注意が必要のようです。

新型コロナウイルス感染症の流行においては、鳥取県の要請を受けてコロナワクチン接種に協力し、PCR検査も行ってきました。全国で人口が一番少ない鳥取県は逆に言えば行政と県民との距離が近いということでもあり、今後とも医師会や県や市町村との連携を密にして、健全な運営をめざしていきたいと思っていますので今後ともご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。🍀

令和4年度 第1回複十字シール運動担当者オンライン会議

2022年9月15日 14:00～15:30

結核予防会事業部

募金推進課長

佐藤 奈津江

令和4年度第1回のオンライン会議には30支部38名と昨年を上回る支部の皆様に参加していただきました。令和2年度からの2年間、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で集合型の会議が出来なくなり、やむを得ず行ってきたオンライン会議ですが、出張が難しい支部の参加が可能になり、マイナスの面ばかりでなく、プラスの面もあると実感しました。

今回の会議の前半は4班に分かれてグループ別の意見交換、後半は各グループの発表を行いました。テーマは「ウィズコロナ時代の複十字シール運動」で、今年計画している（実施した）複十字シール運動について、2年間のコロナ禍の経験から工夫していることや感じたこと、気づいたことなど、ウィズコロナ時代を見据えて意見交換を行いました。一部になりますが、当日の意見交換の内容について報告させていただきます。

テレビやラジオのCM、SNS、デジタルサイネージなどの非接触型の広報媒体を使った活動については前回の会議からも話題になっているところですが、今回の会議でもSNSの活用について支部同士での質問や情報交換が見受けられ、その関心の高さが伺えました。テレビ番組での広報を行っている支部もあり、他の支部はとても熱心に質問していました。また、県からの依頼により県庁の

建物で結核予防の赤色のライトアップを行っている支部もあり、非接触型の広報活動も幅広くなってきた印象を受けました。今回の意見交換では、コロナ禍で従来の対面式の街頭活動が難しくなり、前述のように非接触型の普及啓発活動を模索することで、複十字シール運動が転換期を迎えていると感じました。

また、従来の活動である街頭募金やキャンペーンを再開される予定の支部もあり、その際には手指消毒、検温、ソーシャルディスタンスのために広い会場を使うなどの工夫や、配布するグッズも手指消毒用のハンドジェルなど、感染状況に合わせて工夫している支部もありました。

しかし、その一方で、毎年複十字シール運動に多大なご協力をいただいている婦人会の高齢化や会員の減少、複十字シール運動担当者以外の職員の意識の低下、郵送募金の減少など、まだまだ課題は山積みです。今後も会議を通してこれらの課題を解決する方法を担当者同士で共有して行く必要があると感じました。

最後に忙しい中ご参加いただいた皆様、グループ別の意見交換で進行・発表を快く引き受けてくださった皆様、当日は参加できなくても事前アンケートで報告していただいた皆様のおかげで有意義な会議となりましたことを感謝申し上げます。🍵



多額のご寄附をくださった方々

〔指定寄附等〕(敬称略)

網藤慶子, 横倉公子, 新井真智子

〔複十字シール募金〕(敬称略)

京都府— (団体) 大智寺, 広野保育所, めぐみ幼稚園, 京都府連合婦人会
(個人) 中江章, 中川陸夫, 西村仁美, 奥田桂子, 中井克是, 村田元, 山口務, 津田喜美榮, 市川寛, 上辻治, 菱田多賀志

大阪府— (団体) 三井住友海上火災保険, 鶴見聖書キリスト教会, 小山医院, 大村屋, 鶴満寺, 鴻の里, シンワ, 福祉ネット大和川, 田村栄, 恵生会, コガチ金属工業, 啓仁会咲花病院, なかじまちあき内科クリニック, 本徳寺, 野田家商工, エムズプランニング, 小厚化成, 訪問看護ステーション鶴見橋, 泉本医院, 大竹事務所, いなだ訪問クリニック, 平尾&パートナーズ, 松永医院, 大代ゼンテックス, 藤原税理士事務所, 中崎町法律事務所, 浜中医院, 住吉大社, 大丸鋳造製作所, 大阪ふたば法律事務所, 津田診療所, 溝口医院, 泰和法律事務所, マリンスター, 三島産業, 光テレホニー, 東大阪障害者在宅支援センター菜の花, 福村タイヤ商会, 豊和貿易, 丸昌, 三洋金属熱錬工業, ディアシステム, 亀岡内科, 並木税理士事務所, ユーマス会計, ABC調剤薬局, ヒューマンティー, 江石庵, 清翠会牧病院, みやわき診療所, 金尾不動産鑑定, 池田会計事務所, 森口クリニック, 弘生会老寿サナトリウム, タクセス, イワサキ眼科医院, フォレストシンフォニー, 石田クリニック, 大阪自強館, 吉祥院, 実行教大阪教務庁石切教会, ファーマシーオカムラ薬局とさわ台店, 関西ポストエィング, 山本鋼材, 河野プラント工事, 平野潤一税理士事務所, 大坂雅己税理士事務所, 日炉工業, ボルカノ, 加貫ローラ製作所, 石川特殊特急製本, 大京システム開発, パルコエクスプレス, 前田商店, クリーンケミカル, 明治機械製作所, 小林税理士事務所, 大阪府済生会吹田病院, みねはる耳鼻咽喉科, 紀伊産業, 大阪本町法律事務所, 名越正幸税理士事務所, 飯田俊二法律事務所, やまび

こ会腎・循環器もはらクリニック, 樟蔭学園, 東邦インターナショナル, メンデル, クロダテック, 富美和会特別養護老人ホーム錦織荘, 秀壮会, 境内科医院, 中川歯科, 白鷺病院, 岸和田交通, 井川税理士事務所, さくら, 神慈秀明会神崎支部, 森井塗装店, 東洋製薬化成, 肉の和, 岩本法律事務所, 藤田胃腸科病院, 総持寺, Merinoria, 上村恭一会計事務所, 栃天海堂, ファーマシーオカムラ薬局光風台店, 三協国際特許事務所, 大樹デイスサービスわが家, あずさ監査法人, 全国共済農業協同組合連合会大阪本部, 日本精練, 廣井皮膚科, 日本酢ビ・ポパール, 小林製薬中央研究所, 春栄会, 栗東寺
(個人) 金井史, 浅野英雄, 水谷義房, 吉田哲郎, 宮本俊弘, 小西美代, 南出英之, 玉田典代, 谷口学, 阿部奈々美, 池田典子, 樋口洋子, 金田立男, 木村文雄, 白土武裕, 高松勇, 野村明雄, 三好隆夫, 森本淳祐, 山下晴己, 山名和枝, 鈴木豊栄, 宮崎悦子, 三島洋子, 神里淑子, 村井哲, 北本良弘, 安藤彰, 植田貴光, 西川正一, 岩田吉一, 岩下秀夫, 宇賀一郎, 大平政義, 金杉加代, 米田明弘, 阪口恵藏, 橋衣代, 中谷廣一, 西川昌廣・節子, 橋本祐次, 藤田修一, 藤野正勝, 松下朱実, 森本靖彦, 米田明正, 木村恒雄, 波多野吉洋, 佐藤壽, 梁川健弘, 山下勝弘, 越川澄男, 岡村良孝, 吉田学, 山口伸六, 小林太郎, 矢追正典, 小林一朗, 中村裕之, 伊藤七郎, 上田光子, 大崎正博, 片本皖也, 札場次郎, 芝原英司, 名和茂, 長谷栄, 横山正博, 宮崎茂次, 永井利夫, 若原孝徳, 星川智子, 本田勝則, 西田禎之, 大本昭子, 大槻さくみ, 高橋恵光, 岡野幸義, 兵頭厚子, 西尾一夫, 佐藤賢一, 北居一哉, 松下隆信, 山寺照子, 山口修, 中野眞雅, 大槻文蔵, 河村信幸, 鍵本成敏, 小泉葉里子, 谷口祐晟, 宮本真秀, 小澤昌治, 三ツ橋建彦, 木下芳明, 大森布実子, 中谷浩, 中川洋一, 木村元士, 島津保生, 米虫利津子, 須永恭司, 志村晴信, 村上正光, 村松孝志, 植田嘉明, 西高子, 藤本明久, 小林

修爾, 中村好一, 池内正子, 南順吉, 山本清一, 河面孝子, 後藤和彦, 旗笠裕久, 三浦環子, 北風禎久, 河面孝, 小牟田清, 増田國次, 寺坂邦広, 渡邊和彦, 鈴木崇浩, 菱沼繁道, 平井治徳, 吉田忠春, 木谷和男, 相原芸術, 西田智一, 服部忠之, 志野公彦, 岡部文雄, 道原和己, 伊泊大造, 坂東桂子, 東野治彦, 東昭和, 水本惣二, 久保田佳伸, 久保しおり, 高島相之助, 山根孝子, 中本好子, 嶋田誠, 木野村文生, 田中令子, 大谷光滋, 赤井マリ子, 薩摩和男, 八田光子, 伊坂泰治, 盛田利郎, 渡部ヒサ, 伊庭紀美子, 石原福市, 佐藤勝, 田中正子, 妙代さき子, 山本康子, 西原弘, 橋本重夫, 竹村理, 荒牧哲一, 暮部美津代, 永田清文, 石田泰三, 中村孝枝, 三好千代子, 江端将哲, 間石成人, 小林立美, 宮田津・悦子, 関根清寿, 小倉剛, 岡本安代, 岡本敬司, 西原昌子, 梶井源司, 山崎隆, 中村修一, 岡野助七, 吾郷泰廣, 岡島美津子, 柏原五三 (星芳), 友國武, 三浦朗子, 山本忍, 西岡祥典

本部 (令和3年度ご寄附分) — (団体)

戸田整形外科胃腸科医院, コニカミノルタ
(個人) 天野澤博, 羽入直方, 武内昭二, 長山樹, 大角晃弘, 佐藤奈津江, 加藤誠也, 永田容子, 工藤翔二, 小野崎郁史, 花井耕造, 尾身茂, Khay Mar Aung

ありがとう
ごさいまけ



「複十字」へのご意見をお聞かせください

記事へのご意見, ご感想等を当会へ郵送いただくか fukyu_hq@jata.or.jp にお送りください。
内容の充実に向けて活用させていただきます。

2022年(令和4年)11月15日発行

複十字 407号

編集兼発行人 小林典子

発行所 公益財団法人結核予防会

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町1-3-12

電話 03(3292) 9211(代)

印刷所 株式会社マルニ

〒753-0037 山口県山口市道祖町7-13

電話 083(925) 1111(代)

結核予防会ホームページ

URL <https://www.jatahq.org/>

〔編集後記〕

近所の神社で2年ぶりにお祭りが開催されました。屋台に御囃子に地元の子ども達。小中学生時代、友人とお祭りに出かけたのを思い出して懐かしくなりました。

本誌は皆様からお寄せいただいた複十字シール募金の益金により作られています。

令和4年度複十字シールご紹介

複十字シール運動は、結核や肺がんなど、胸の病気をなくすため100年近く続いている世界共通の募金活動です。複十字シールを通じて集められた益金は、研究、健診、普及活動、国際協力事業などの推進に大きく役立っています。皆様のあたたかいご協力を、心よりお願いいたします。

募金方法やお問い合わせ: 募金推進課

結核予防会 募金

検索

またはフリーダイヤル: 0120-416864 (平日9:00~17:00)

令和4年度複十字シール



🌸 2022 結核予防週間レポート 🌸

愛媛県



2022/09/14（水）～2022/09/16（金）の3日間、日没から22時の時間帯で、愛媛県庁本館ドームを結核予防のシンボルカラーである赤色にライトアップ。

プレスリリースや県庁ホームページ等を活用し、結核を正しく理解し予防するにはどうしたらよいかを考えていただくきっかけとして、また、感染症はコロナだけではないことも認識していただく意味も含めた周知・啓発を行なった。

福岡県



【上】福岡 PayPay ドーム大型ビジョンにて放映（9/24.25）

【下】西鉄電車の中ビジョン：多くの人の目に留まっていたさく、今回初の試みとしてポスターを利用して15秒動画を作成し、1か月間放映（9/1～30）

佐賀県



令和4年9月23日に実施した複十字シール運動キャンペーンの写真（ゆめタウン佐賀）

長崎県



諫早市本町商店街ポケットパークにて、婦人会の協力のもと、結核の常識、リーフレット、ポケットティッシュ等を配布して募金への呼びかけを行った。募金者にはカットバン、付箋、複十字シールを配布した。

熊本県



スタッフ数や開催時間短縮など感染症対策を十分に行い、普及啓発キャンペーンを実施した。婦人の会様、熊本市様協力のもと、啓発グッズ配布を中心に募金運動を行い、当支部キャラクターの活躍もあり多くの方にご支援を賜った。

宮崎県



イオンモール宮崎で健康増進婦人の会の方と共に街頭キャンペーンを行った。その様子はニュースや新聞に取り上げられて、広く県民に発信することができ予防の大切さを伝えることが出来た。

鹿児島県



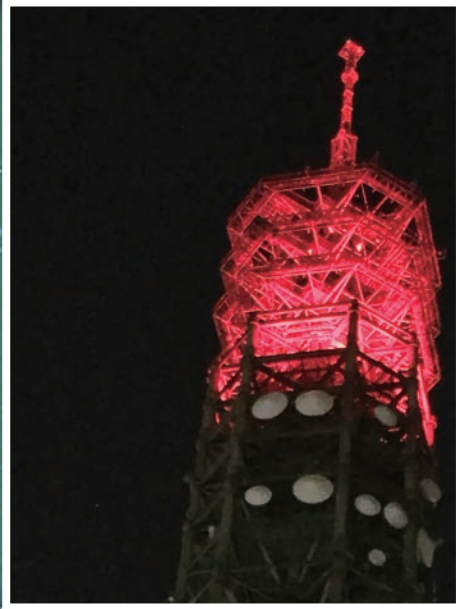
鹿児島県庁入り口での展示の様子



… 結核予防週間 …

スカイツリー西東京

ライトアップ写真



中島 良彦 さん
東久留米市南町



関 健太郎 さん
東久留米市南町



匿名希望
西東京市芝久保町



あおちゃんの女房 さん
西東京市新青梅街道



尾花 健一郎 さん
東久留米市南町